

# 目 次

Fanny PriceとMolly Gibson—カントリー・ハウスの伝統を継承するヒロイン達 (1994年6月4日 第6回例会講演)

.....波多野 葉 子..... 1

エリザベス・ギaskellにおける保守と革新 (1994年10月16日 第6回大会講演)

.....小野寺 健..... 19

*Cranford*—平和をもたらす使者となって

.....松 本 智 美..... 31

女性作家としてのギaskell—『シャーロット・ブロンテ伝』が語る女性自身

.....佐 野 智 子..... 39

“The Old Nurse’s Story” の娯楽性と倫理性

.....足 立 万寿子..... 43

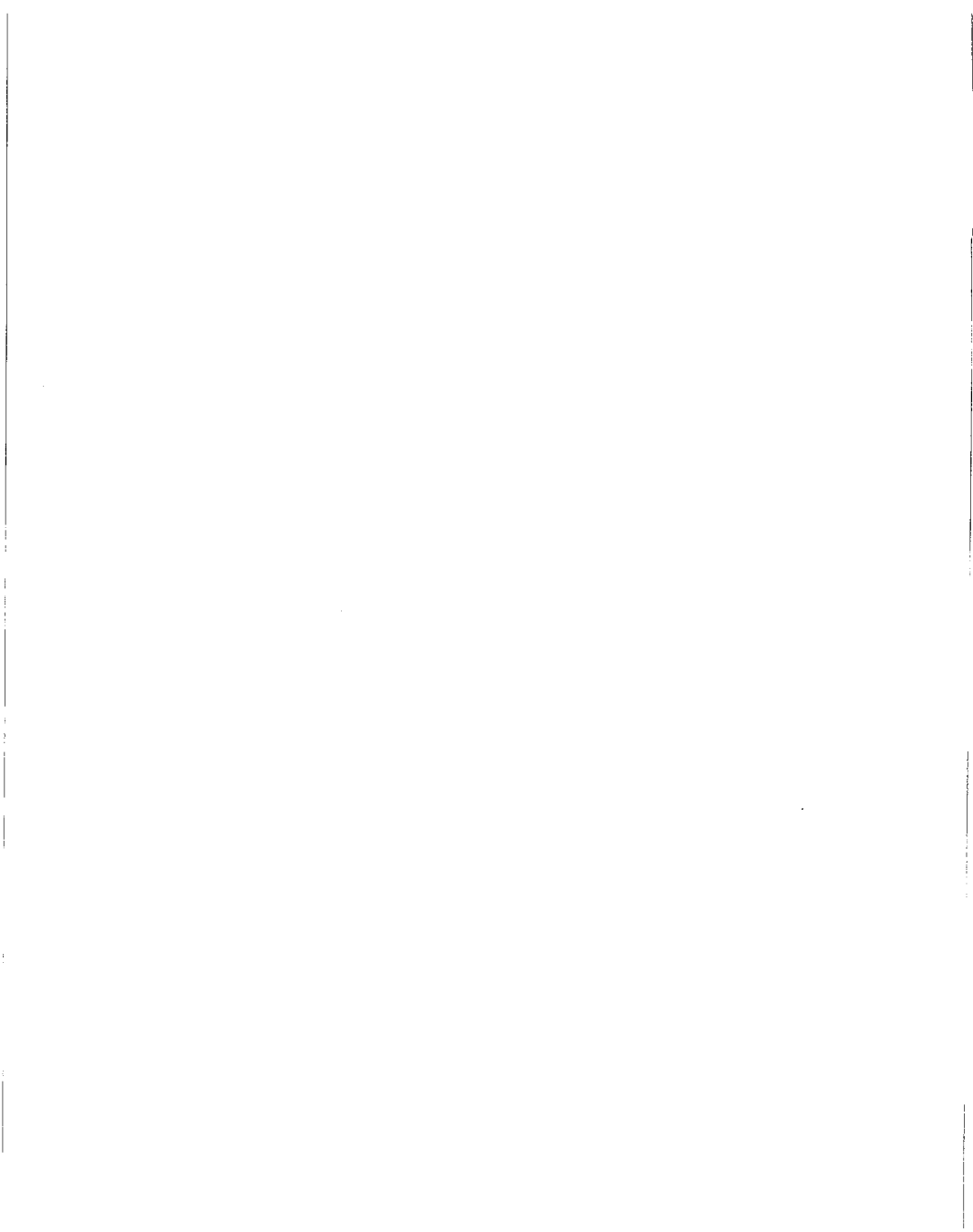
*Wives and Daughters*—Sublimation of Mrs Gaskell’s Social Interest?—

.....東 郷 秀 光..... 57

---

ギaskellの『ルース』と一葉の『大つごもり』対比研究

.....金 丸 千 雪..... 1



# Fanny PriceとMolly Gibson- カントリー・ハウスの伝統を継承するヒロイン達

## Fanny Price and Molly Gibson: Bearers of the Country House Tradition

東京家政学院筑波短期大学

波多野葉子

Yoko Hatano

Tokyo Kasei Gakuin

Tsukuba Junior College

ジェーン・オースティン (Jane Austen) 作『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park*:1814)とエリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) 作『妻達と娘達』(*Wives and Daughters*:1864-6)には著しい類似点が存在し、それは作品のモチーフ、筋のみならず、舞台設定、登場人物の性格や果たす機能にまで及んでいる。<sup>1</sup>特に中産階級出身のヒロインが、カントリー・ハウスに象徴される伝統的精神遺産の継承者としての資質の故に旧家に迎えられ、滅亡の危機に瀕した伝統精神の復活を助けるという筋は、産業革命により勢力を拡大しつつあった新興中産階級と土地を基盤とした伝統的支配階級の対立を背景にしており、19世紀の代表的時代思潮の文学的表象となっている。更に主人公の出世物語は、英国の階級制度に伝統的に存在したが、産業革命が加速した英国の階級制度の特徴である現象が下敷となっている。本論は両作品の類似点を検証することにより、両作品がこの時代思潮と英国に特徴的な階級制度が融合したものであることを論証することを目的とする。

両作品のモチーフは基盤を都市の資本に持つ新興中産階級と、田舎の土地に置く地主階級という新旧二大勢力の対立で、両作品は既に社会的、経済的に衰退の憂き目にあるばかりかその伝統的な精神遺産をも触れつつある旧勢力が、存続を賭して新勢力の攻勢を防ぐ物語である。当然都市と田園の

対比は舞台設定と登場人物の性格設定の重要な要素となり、カントリー・ハウスに象徴される伝統的精神遺産は、非地主階級出身ながら伝統的価値観に支えられ“the lady of the manor”となる資質を持つファニー・プライス及びモリー・ギブソンの力で、新勢力に屈するのを寸前で免れその存続を維持していく。当然都市文明に汚染されたメアリ・クローフォードとシンシア・カークパトリックの人物設定は、ファニー及びモリーと対照をなし、それは同時に田舎対都市の構図を形成している。つまりファニーとモリーは田舎とその伝統を、メアリとシンシアは都会と都市文化を具現していると言えよう。従って由緒あるトーリーの一門の伝統遺産を受け継ぐエドモンド・バートラムとロジャー・ハムリーそれぞれのメアリとシンシアへの執着は、伝統遺産が都市の文化に屈伏しかけたことを示し、二人のファニーとモリーとの結婚という結末は、田園の伝統への復帰を意味する。当然この三角関係は両作品のプロットの展開、及び人物設定に重要な役割を果たしている。

実際主人公と都市志向の娘の性格は鮮明な対照をなしている。『マンスフィールド・パーク』では、ファニーは自然の癒す力が人間性に与える道徳的影響の故に、自然の人工への優位性を認めているが、メアリは生来都市志向で、“decided preference of a London life”<sup>2</sup>を有している。フライシュマン(A. Fleishman)は述べる—“Jane Austen labors to ascribe to her a Johnsonian preference for the city to the country—not merely a taste for urban high society but a conscious choice of civilization over nature.”<sup>3</sup>そしてメアリの農村社会への無理解と地主階級の一員としての責任感の欠如は、ハーブのエピソードに明らかである。自己の楽しみを追求し、農繁期に馬と荷車でハーブを運ばせようとした彼女は、その結果、“all the farmers, all the labourers, all the hay in the parish” (MP 48)の感情を損ねてしまう。又、彼女が田園社会での聖職者の果たす役割が理解できないことは、叙階を望むエドモンドに異を唱えるくだりに良く表れている。エドモンドの決意に驚愕したメアリは、“You assign greater consequence to the clergyman than one has been used to hear given. . .” (74-5)と反論する。地主と聖職者は伝統的田園社会には不可欠な構成要素であったことを考えると、メアリのこうした反応は、彼女の無知と特権階級の一員としての自覚の欠如を物語っている。彼女は“with an ethos of refined nihilism — as the exemplar of aristocratic decadence” (30-1)として描かれている、というフライシュマンの言葉は正鵠を射たものと言えよう。一方メアリとは対照的にファニーは、

不在地主であるヘンリー・クローフォードに地主としての自覚を与え、彼は遂には領地でパターナリストとしての責務を遂行しようとするまでに変貌を遂げる— “He had introduced himself to some tenants, whom he had never seen before; he had begun making acquaintance with cottages whose very existence, though on his own estate, had been hitherto unknown to him” (MP 315-6). そしてパターナリストとしての地主階級の役割を何よりも重要視するファニーは、ヘンリーの変化を心から喜ぶのである。

ファニーとメアリはまた、伝統と過去に対しても対照的な態度を示す。ファニーは昔から伝わるものに興味と愛着を示し、その保存に大きな関心を持つ。従ってエリザベス朝から存続するサザトン邸の訪問を切望し、訪問の折には由緒ある屋敷に尊敬の念を覚え、夫人の説明に熱心に聞き入る。更に、過去の情景に思いを馳せ想像を膨らませることに無上の喜びを覚える。ところがメアリは無礼にならないように聴くのみであった。またサザトンの古い並木を切るラッシュワース氏の計画を聞き、ファニーはクーパー (William Cowper)を引用して嘆きを表す— “Ye fallen avenues, once more I mourn your fate unmerited” (46). この点に関してダックワース (Alistair Duckworth)の次の主張は示唆に富んでいる— “The trees . . . have provided an emblem of organic growth throughout English literature. . . . On the other hand, the cutting down of trees has suggested a radical break with the past. . . .”<sup>4</sup> 従って並木伐採に対するファニーの否定的な反応には、過去を敬い古き良きものの存続を願う心が察知できよう。ならば彼女が、変化、改造を嫌い、ヘンリーのソーントン改造計画に反対するのは当然と言えよう。更にダックワースの “In terms of a value system that is to be found throughout Jane Austen’s fiction, Thornton is a substantial and healthy estate.” (53)との主張は、ファニーの反応の健全さを裏付ける。当然彼女のヘンリーに向けられた視線は、深刻さを通り越して責めるようであった。一方メアリは兄を “such a capital improver” (191)と賞賛するのである。

『妻達と娘達』においてもモリーとシンシアの性格設定には、明白な田舎対都会の構図が見てとれる。まず趣味や好みにおいて二人は対照的な差を見せるが、モリーの田舎志向は既に彼女が初めてハムリー一家を訪問した折に、牧歌的風景に感銘を受けることに明かに現れている—

A flower-garden right below; a meadow of ripe grass just beyond, changing colour in long sweeps, as the soft wind blew over it; great old forest trees a little on one side; and, beyond them again . . . the silver shimmer of a mere. . . . The deliciousness of the early summer silence was only broken by the song of the birds, and the nearer hum of bees. Listening to these sounds, which enhanced the exquisite sense of stillness, and puzzling out objects obscured by distance or shadow, Molly forgot herself. . . .<sup>5</sup>

クレイク(W. A. Craik)の指摘するモリーの“sensuous responses to the natural scene . . . for which she has always had an unostentatiously Wordsworthian enthusiasm” (257-8) は、サザトン邸訪問の際にファニーがみせた自然の力を賛美するロマン派的趣味と相似する。また二人のロマン派的傾向は文学の好みにも反映されており、ファニーはクーバーやスコットを引用し、モリーはハムリー家の書斎のスコットの小説を読み耽ける。モリーのこうした傾向はさらに、ハムリー家の時代遅れではあるが、上質の材質で作られ手入れの行き届いた家具やしつらえへの愛着へと繋がっていくが、それも家具がギブソン家のものと同質とあらば当然であろう。ここでもモリーの古い物を慈しむ心は、サザトンでのファニーの反応と呼応する。そしてハムリー家の豊かな自然と伝統と歴史に囲まれて第一日が閉じた時に、“the sounds of the solitary corncrake, and the owl hooting in the trees” (102)を聞きながら、これからのハムリー・ホールでの暮らしに良い予感を覚えるのであった。

モリーのこうした田舎志向は美意識のみならず精神面にも見られるが、それは田園精神の権化であるスクワイア・ハムリーが彼女の価値を認めたことが雄弁に物語っている。実際ハムリー家はその古い家柄故に、田舎が連想させる伝統と過去を象徴している。現にホイッグの貴族であるクムナー家の歴史が浅いことは、レイディ・ハリエット自らが認めている。クムナー家より遥かに古い家系を誇るハムリー家の当主に認められたことは、古い英国の伝統と過去の遺産の継承者としてのモリーの資格を証明するものにほかならない。

一方シンシアがメアリ・クローフォード程極端ではないが、同じく都市志向の持主であることは、彼女が“very ready to be easily persuaded into

the perpetual small gaieties which abounded in her uncle's house in London, even at this dead season of the year”(556)であることから窺える。また田舎が継続と安定を示唆するのに対して都会は変化を象徴するので、彼女の度重なる心変りは彼女が都市のエトスを持っていることを暗示する。とすれば最後にロンドンの弁護士とロンドンで結婚するのも首肯ける。そして彼女の選択の基準が伝統的価値観から逸脱することは、レイディ・クムナーの“there is a general prejudice against attorneys.”(662)との言葉が示唆している。とりわけハムリー・ホールの精神を受け継ぐロジャーを裏切りヘンダーソンを選んだことは、彼女が田舎と伝統を理解しないばかりか、彼女の軽薄な好みと価値観を示しており、実際ギブソン氏も、“I don't wonder she preferred him [Henderson] to Roger Hamley. Such scents! such gloves! And then his hair and his cravat!”(658)と述べ笑っている。従って彼女はロジャーのような“people of deep feelings”(656)は好まず、もしロジャーと結婚したなら彼に飽きてしまうであろう、という彼女の予感的中していたことであろう。当然彼女には、まもなくヨーロッパ中で名声を馳せるであろう彼の優れた資質を理解することは無理であった。またロンドンに親戚が住んでいることはそれ自体悪いことではないが、彼女がロンドンに帰属することを示唆する。現に叔父は、結婚式が自分の家から執り行われることを勧めるのである。かたやモリーは田舎町に住み、ハムリー村の古い家系を誇るトーリーの郷土であるハムリー一家との交友を通じ成長する。つまりホリングフォード卿が称するように、彼女は“good little country girl”(676)そのものと言えよう。

こうして様々な面に窺えるファニーとモリーの田舎のエトスは、メアリとシンシアの具現する都市文化と対照をなすが、それが単に好みに留まらず人間性にも大きな影響を及ぼしている点が重要である。例えばファニーは、“in observing the appearance of the country, the bearings of the roads, the difference of soil, the state of the harvest, the cottages, the cattle, the children”(MP 66)に喜びを感じるが、それは彼女の良き“Lady Bountiful”としての素質を如実に示している。ところが、“Miss Crawford was very unlike her. She had none of Fanny's delicacy of taste, of mind, of feelings; she saw nature, inanimate nature, with little observation. . . .”と語り手はファニーに軍配を挙げ、メアリの自然への無関心を批判している。こうした彼女の態度は、既に述べたハーブのエピソードやエドモンドの叙階

への反対、そして不道徳的な芝居の練習に積極的であることに繋がる。

同様にモリーとシンシアの性格も際だった対照を見せる。まずモリーは“clear conscience and her brave heart” (WD 573)を持ち、謙虚で思いやり深く、正直である。そしてギブソン氏が評するように節操が固く、一旦愛したらシンシアのように簡単に愛情を移すような娘ではない。そうした徳は、自らの名誉を犠牲にしてシンシアの為にプレストンと対決した時に如実に表れるが、モリーの勇気と静かに屈辱に耐える姿をレイディ・ハリエットは的確に“the child is truth itself. . . I both like and respect her. . .” (578)と評価している。一方シンシアは元来優しい気持ちの持主ではあるが、変りやすく、人の歡心を買おうとし秘密主義であるばかりか、母から見ても“flirt” (592)するのは性格上避けられない。従ってプレストンと婚約しているながら、ロジャーとも婚約した上、あたかも気があるような素振りでもココスの気をも引いた後、ヘンダーソンからも求婚される程節操がない。彼女も自らの不誠実な性格を認めつつ、自分は人に好かれたい気持が強く身近な人全てに好かれるよう振舞ってしまうが、相手の想いが強くなると煩わしくなり身を引きたくなってしまふ、と弁解する。彼女自身の言葉は、彼女は主義が欠如し人を傷つけるのも厭わない自愛心の塊であることを示す。そうした軽薄な変りやすい自己中心性は、母からの遺伝でもあり、満たされなかった子供時代の所産でもあるのだが、モリーの忍耐心、勇気、愛、そして“steady disposition” (389)と両極をなしている。所詮シンシアの華やかさは、“rather the glitter of the pieces of a broken mirror, which confuses and bewilders”なのであり、ロジャーが最後に気付いたように、モリーより劣っていることは明白である。従ってどちらの作品でも、田舎を好む主人公に優れた人間性が付与されているばかりか、彼女達は都市志向のライバルに良い影響を及ぼす。その結果シンシアはモリーに“I’ve never lived with people with such a high standard of conduct before. . .” (456)と述べ、自分のモラルが劣っていることを悟る。同様にメアリはファニーといると人格が改善されることに気付く。これは田舎が持つ人間性に与える良い影響を示唆するもので、この図式は両作品で田舎が都会より優れた属性を付与されていることを示す。

このように優れた属性をもつ田舎が抗し難い都会の魅力に喘ぐ様を、三角関係は如実に描いている。“careless and extravagant” (MP 19)である長男とは異なり、“strong good sense and uprightness of mind”を持つエド



モンドは、地主階級の精神遺産を守る若い世代の最後の若者であったが、メアりに執着する余り新勢力を象徴する芝居の稽古の悪い点が分らず、サー・トマス帰還後、ファニーのみが一貫して正しい判断を下していた、と報告することになる。同じ点がロジャーにも完全に当てはまる。父が長男ではないが所領に興味を持っていると評し頼りにしていた彼は、“a strong built cheerful, intelligent country farmer” (WD 216)の風貌を持ち、ハムリー・ホールの伝統を維持する能力に恵まれていた。しかしモリーより魅力的なシンシアに恋してしまう。こうして次男ではあるが伝統的精神遺産を受け継ぐ資質を備えた二人が、外見の華やかな女性に夢中になり、都市のエトスに感わされてしまうのである。

精神的相続者の都市を象徴する女性への執心の機能は、旧勢力の危機的状況を描くことにある。どちらの作品でも長男は既に新勢力に屈し、由緒ある家系の精神遺産の存続は、長男相続制度の故に地位も財産も継げない次男にかかっている。そうした状況の下での都市の価値観を持つ女性への愛着は、田園社会の伝統の完膚な崩壊が迫ったことを暗示している。もし三角関係が伝統遺産を相続する器量のない長男との間に起きていたのなら、これほどの危機感を包含しはすまい。まさにマンズフィールドとハムリー・ホールに象徴される“Old England”は瀕死の状態であり、共に精神、経済両面の問題を抱えていたのである。

まず精神的問題は両家共に長男が伝統を継承する素質に欠け、繁栄の可能性の少ないことに露見している。たとえ牧師館とグレート・ハウスが近接していることで、エドモンドが在任の良き牧師となることが予見できても、本家の運命はトムの手にはあつては楽観できない。またハムリー家も、ロジャーがダーウイニズムを連想させる新しい学問で名声を馳せようとも、ハムリー・ホール自体の繁栄は疑わしい。アルフレッド大王時代以前から続いた旧家は新しい時代の象徴する学問を追及し、田園の伝統から離れた所で生き延びるしか道はないといえよう。そもそも両家は長男の教育を誤ってしまった。トムは、“robbed Edmund for ten, twenty, thirty years, perhaps for life, of more than half the income which ought to be his.” (MP 21)程の散財癖が示唆するように、地主階級の長男としての自覚が皆無な青年である。オズボーン・ハムリーにはトムより作者の好意が感じられるが、身分相応の教育が蔑ろにされたことには変りはない。ランズベリー (Coral Lansbury) は、“Mrs. Hamley has taught Osborne to be oblivious to the material aspects

of the countryside and to devote himself to its aesthetic qualities. . . .”<sup>6</sup>と指摘しているが、スクワイアとて同罪で、オズボーンの学問的成功に期待していた頃、彼の気難しさや優雅さを由緒あるハムリー一家を再興してくれるような良縁への一歩と考え、彼を甘やかしていたのであった。その結果オズボーンはケンブリッジで失敗し負債を残したばかりでなく、最後にはカトリックでフランス人の召使に生ませた混血の男子を残して世を去ることになった。これ自体でもハムリー一家には打撃であったが、彼の負債は既に没落しかけていた家を更に窮地に追い込んでしまう。彼の教育は予期せぬ出費の原因となった好みの難しさと共に多額の出費をもたらし、ハムリー一家の基盤を更に脆弱にしたのである。このように両家共、長男は精神的危機のみならず経済的危機を引き起こす。

しかし両家には更に根本的な経済問題が内在していた。スクワイア・ハムリーは工業化のもたらした変化に追いつけず、一家は困窮していた。ランズベリーはその経緯を、“a man like Squire Hamley was becoming anomalous in English agricultural life. He was unable to dispose of his property because of entails and family sentiment.”(184)と説明する。つまり新しい耕作法や作物を導入して収穫嵩を増やしたり、家畜や農作物の品種改良で増益を図った当時よくいた“improving landlord”や、炭鉱や工場を経営する企業家には変貌できず、変遷する時代を生き延びるべく財産を増やすことができなかったのである。彼が頻繁にハムリー家の古い起源に言及しクムナー家の歴史が浅いことを耶揄するのは、優越感ばかりでなく、嫉妬と焦燥感の表れに他ならない。

同じようにバートラム家も新しい時代故の経済的問題を抱えていた。マンズフィールドの所領はバートラム家の贅沢な暮らしを支えるには十分ではなく、植民地からの収入に頼っていたのである。ウェッブ(Igor Webb)は述べる—“The most important and most perplexing historical fact of the novel is that the estate of Sir Thomas Bertram depends on a sugar plantation in the West Indian island of Antigua.”<sup>7</sup> 実際、古き良き農村の共同体は唯一地元の農業に支えられており、地主階級が重商主義と無縁であると言うのは、文学上の神話にすぎない。史実はシェリダン(Richard B. Sheridan)から引用しよう—“the improving landlords of 18th century England and Scotland derived their wealth from colonial property, mineral rights, and urban rents rather than the profits of agriculture.”<sup>8</sup>

そして17世紀や18世紀にはカリブの砂糖産業が新しい富の源となっていたので、パートラム家もその恩恵に浴していたと設定されていたと考えても無理はないであろう。実際彼らの富と快適な生活が植民地の荘園に頼っていたことは、ノリス夫人が明らかにしている—“Why, you know Sir Thomas’s means will be rather straitened, if the Antigua estate is to make such poor returns” (MP 26). 実はその時は既にマンスフィールドの経済状態は、長男の浪費と西インド諸島の荘園での損失により悪化していたのであった。まさに問題が累積した植民地での搾取の上に成り立つマンスフィールドの贅沢な生活は安泰からはほど遠く、土台が腐食しかかっていたのである。

そして快適なマンスフィールドの暮らしを脅かすものは、まさに新しい時代の意識の創造物の反奴隷制運動であった。西インド諸島では奴隷の扱いが残虐を極め、彼らは文字通り酷使され使い切られた挙げ句、新しく連れてこられた奴隷で補充されるという状態であった。奴隷貿易の廃止で既にいる奴隷に子孫を造らせる必要性が生じたが、奴隷の健康状態に留意することは、思うように荘園の管理ができない不在地主には不可能であった。そして干ばつによる凶作に追い打ちを駆けられ、財政破綻の水際で苦しむ不在地主達があったので、サー・トマスの状況もこれに類して設定されていたと考えても無理はなからう。

このように両家共精神、経済両面の問題に悩んでいたが、ファニーとモリーを迎え、少なくとも伝統的精神遺産は死守することになる。従って当初存在価値の薄かった二人は、両家にとり不可欠の人物へと変貌を遂げる。物語の初めにサー・トマスは息子達とファニーが恋仲になるのを懸念し、彼女を引き取るのをためらう。そして娘達とは身分が違うのだから、“she is not a Miss Bertram” (MP 11)であることを悟らせるべく扱うよう求める。この延長線上にはファニーの身分では息子達の相手として適しくないという考えが窺えよう。そしてスクワイア・ハムリーも当初同様の懸念を表明する—“It would never do him [Osborne] to fall in love with Gibson’s daughter — I shouldn’t allow it.” (WD 88) —なぜなら由緒あるハムリー家の長男として、どんな良縁も望めると父は考えていたからである。そして所領を相続できないロジャーには財産家の娘との結婚を望んでいた。とはいえスクワイアの“honourable blood” (436) への偏愛はシンシアに上流階級の血が流れていることを知る時に顕れる。結局血筋も財産もないモリーよりシンシアの方が、息子の妻として望ましいのであった。

このように、サー・トマスもスクワイア・ハムリーもファニーとモリーの低い身分が気になり、そのことが両家での二人の扱いに影響を及ぼす。特にファニーはノリス夫人の粗雑な扱いが象徴するように、最も存在意義の低い者として扱われ、当初はエドモンド以外からは無視されることが常であった。しかし役に立ちたいとの願いや感謝の念を常に持っていたので、まもなくバートラム夫人にとって手放せない姪となり、更に自分の娘達の教育を誤ったことに気づき、その低俗な人格に失望したサー・トマスの信頼を得るようになる。地主階級に必要な義務感を教えこまれておらず、自己の欲望のみを追求する女性となり、都市の文化に汚染されてしまった娘達とは対照的に、ファニーは気だてが優しいばかりか、確固とした主義主張、一貫性、強い義務感を持っていた。まさに彼女にはダックワースが述べるように、本能的な義務感があり、それはマンスフィールドの伝統文化の存続には欠かせないものであった(71-2)。従って、最後にサー・トマスは“*Fanny was indeed the daughter that he wanted*”(MP 368)と感じるのである。まさに当初屋根裏部屋に置かれた部外者の彼女はマンスフィールドの伝統的価値観を回復させることにより、最も価値のある人物へと変化し、周辺から中心へと移動したのである。

モリーも同様な変化をする。クレイクが主張するように、確かにモリーの場合はファニー程“*neglected, her worth unacknowledged, helpless and isolated*”(247)ではない。しかし息子達の妻としては不相当として彼女を見なしていたスクワイアが、最後にはロジャーに彼女を薦めるのは、彼女の存在意義が増しハムリー家にとって不可欠になったことにほかならない。“*... I dare say I should ha' been angry enough at the time, but the lassie would ha' found her way to my heart. ... don't you think you could turn your thoughts upon Molly Gibson, Roger?*”(WD 688) また初めはハムリー夫人の愛情を得ていたことも、ファニーの場合と重なる。そしてそれがスクワイアへにも伝わり、最後に彼はサー・トマスの気持ちと全く同じ内容の言葉を発する—“*... I look upon you as a kind of daughter more than madam there!*”(684)。こうしてファニーもモリーも元来中産階級の出身でありながら、地主階級に伝統的な徳を持っていたために、両家の戸主に認められたのであった。

ファニーとモリーの徳と価値観は、二人の優れた判断力、他人への思いやり、主義主張の一貫性、気丈さに表れており、一見「家庭の天使」と間違わ

れる程の優しく従順な性格の下には、不正や誤った判断には妥協しない強さを秘めている。まずファニーは優れた判断力と高潔な精神の故に、一族の人望を集めていたエドモンドさえ敵わない主義を曲げない性格を芝居のエピソードで見せ、ヘンリーのプロポーズをあく迄も退けて、周囲の圧力に負けない気丈さを露にする。この縁談は世俗的にはサー・トマスが述べるように、二度と巡っては来ない“*eligibly, honourably, nobly*”(MP 247)に身を固められる、いわば玉の輿に乗る機会であるので、ファニーはサー・トマスの不興をかい、一時的に実家に戻されてしまう。彼女の“*independence of spirit*”は“*wilful and perverse*”と非難されるが、それも彼が彼女を含めてプライス家にしてくれたことを思えば当然と言えよう。バンフィールド(Ann Banfield)が述べるように、恩人でもあり身分が上でもある人に逆らうオースティンのヒロインは、他には見当たらない。<sup>9</sup>当然天使のように優しいファニーのこの強さは周囲には驚愕をもって受けとられ、常に味方をしてくれるエドモンドでさえ、“*so very determined and positive! This is not like yourself, your rational self!*”(MP 270)と驚きの言葉を発する。

モリーのファニーに劣らない気丈さは、シンシアの手紙を取り返すために自らの評判を犠牲にしてプレストンと対峙する時によく表れる。そして彼女の勇氣、正義感、シンシアを思う心、強かさに、卑劣な彼でさえ感動を覚える—“*He forgot himself for an instant in admiration of her. There she stood, frightened, yet brave, not letting go her hold on what she meant to do, even when things seemed most against her. . .*”(WD 533)。またモリーの尋常でない気丈さは、レデイ・ハリエットが姉妹を耶揄したことに怒りを覚え、彼女がブラウニング姉妹宅にモリーを訪ねようとするのを、はっきり断る時にも表れる。ヴィクトリア朝のような身分社会では、並の娘であったらそのような申し出を誇りにこそ思え、断ることなど夢にも思わなかったことであろう。

実はモリーは既に子供の頃から強さを垣間見せていた。召使のベスが家庭教師に無礼な口をきくと、モリーは激昂して彼女を庇い、さしものベスも怯んだものであった。モリー自身成長してから、自分の烈しい気性に気がつく。しかし分別と知性がそれを勇氣のある性格へと変えたのであった。

モリーの知性が烈しい気性を、均衡のとれた、公正を愛し、理性的で独立心に富んだ性格に作り変えたことは重要である。彼女は子供の頃学ぶ意志が旺盛であった。しかし父が女子には学問は不要と考え彼女の知的な試みを全

て妨害した為、内容のいかに拘らず手に入るものを手当り次第に読んで、知的好奇心を満足させる他なかった。そのような状況から引き上げてくれたのはロジャーである。彼がそれ迄彼女が読んでいたフィクションや詩より高邁な内容の本に興味を持たせた結果、彼女は彼の最も有望な生徒に成長したのである。その様なモリーの知性はホリングフォード卿にも認められ、「彼女は知的で、全ての高尚なことに興味を示す」と評されるまでになる。このような知性と先天的強さが最も表れたのが、プレストンと対決した時といえよう。ランズベリーのモリーの“goodness is not passive, a denial of action, but the positive force in the novel.”(204)という主張は真に正しい。そしてファニーもモリー同様読書が好きで、思えば彼女の精神もエドモンドに育まれた感がある。実際彼は彼女の知性と読書欲を見抜き、彼女の読書指導をして彼女の知性や判断力を高めたのである。

この様にして身につけた教養と知性で天賦の資質を研ぎ、ファニーもモリーも由緒ある家で高く評価されるようになる。ここで大事なことは、二人の徳は地主階級の女性が伝統的に持っていたものであるということである。歴史を紐解くと、ジェントル・ウーマンは従順な「天使」などではなく、夫の留守などには必要ならば敵と武器をもって戦うほど勇ましい女性達であった。また所領や使用人の管理にも采配を振るい貧しい者の面倒も見だし、学問を好み知性の高い女性も特にエリザベス一世の宮廷には多かったのである。<sup>10</sup> 従ってファニーとモリーの気丈さ、知性、身分が下の者や、困窮者の面倒を見る態度は、地主階級の女性に伝統的なもので、特にそのパターンリスト的態度は、“Lady Bountiful”としての資質を示していると言えよう。元来“noblesse oblige”は英国地主階級の理想とするもので、“the lady of the manor”になる必須の条件であったのである。

これまで明らかになったように、両作品の類似点は、田舎と都市の対立をモチーフにして描かれているが、この対立は産業革命への拒絶反応の産物である。言うまでもなく産業革命は、物理的に自然を破壊したばかりか、資本を基盤とした新興中産階級に、土地を基盤とした地主階級の覇権を脅かすほどの力を与え、社会、経済機構のみならず、価値観、習慣等も変えようとしていた。当然人々は喪失感にさいなまれ、新旧勢力の対比には敏感になり、産業革命以前の牧歌的風景の残る過去に回帰願望をもつようになった。そして失われたエデンの園として過去を理想化し、ノスタルジアに耽けるようになったのである。この脅迫観念にも似た心理は、「中世主義」(medievalism)

と呼ばれ、19世紀英国の様々な面に足跡を記した。例えば、政治面ではディズレイリ(Benjamin Disraeli)率いる若きトーリー党員で構成されるYoung Englandが、宗教ではニューマン(John Newman)らのオックスフォード運動、建築ではピュージン(Augustus Pugin)を中心とするゴシック・リヴァイヴァル、芸術ではラファエル前派があげられる。また文学ではアーサー王伝説を再現したテニスン(Alfred Tennyson)の『国王牧歌』(*Idylls of the King*: 1859)が有名であるが、トロロープ(Anthony Trollope)のバーセットシャー・シリーズも中世懐古主義を色濃く反映した作品群であり、作中随所に窺える彼のトーリー主義はディズレイリとも一脈通じる。さらにカーライル(Thomas Carlyle)、ラスキン(John Ruskin)、そしてモリス(William Morris)も中世主義の強力な信奉者であった。“medievalism”についてチャンドラー(Alice Chandler)は述べる—

Starting as far back as the Elizabethan era . . . the study of the Middle Ages had continued to develop throughout the seventeenth and eighteenth centuries. Scott brought this interest to a focus by creating a completely believable medieval world, which he portrayed so vividly and attractively that many of his readers took it for historical truth rather than historical fiction. . . . Neither Scott nor the later medievalists would have been able to popularize the Middle Ages, however, were it not for the era in which they wrote.<sup>11</sup>

従って中世懐古主義は広範な工業化がなくては、これ程まで浸透しえなかったであろう。その点で時代の申し子であり、オースティンとギヤスケルにも影響を与え、『マンスフィールド・パーク』と『妻達と娘達』も中世主義を反映した作品となったのである。両作品は共にカントリー・ハウスを舞台にして衰退しつつあるトーリーの旧家が新勢力の侵略に存続を賭して掻く様を描いた、滅びゆく古い体制へのエレジーと言えよう。

両作品に共通する主人公の地主階級への出世物語は、優れて英国的な階級制度を基礎として構成されているが、やはり工業化が促進したものである。大陸諸国と比べると、英国は伝統的に階級間の移動に寛容であった。事実トクヴィル(Alexis de Tocqueville)は、大陸諸国と比較して英国の階級制度が開放的なことに驚いている。<sup>12</sup> 又レトウィン(Shirley Letwin)によると、中世

初期から英国には階層間の移動が見られ、階級の区別は混乱状態にあった。その結果確信をもって自分の先祖について誇れる英国人は存在しないという。実際エリザベス一世の六代前は農奴であったようだ。<sup>13</sup>ブリッグス(Asa Briggs)はこの許容性を‘removable inequality’<sup>14</sup>と称しているが、産業革命を最初に起こし世界の工場となった英国には、以前から重商主義の萌芽が芽生えていたことであろう。ならば経済力を持つ中産階級の勢力を無視することは不可能であったに違いない。こうした出世の可能性が、シティで成功を修めた中産階級が田舎に住居を求め、カントリー・ジェントルマンの暮らし振りを真似るのが常となった事情を説明する。なにしろカントリー・ジェントルマンは英国人の究極の理想像なのである。トンプソン(F. M. L. Thompson)によると、新興中産階級が商業的成功を遂げた場を退き、完全なカントリー・ジェントルマンとして田舎に落ち着く迄には、二世代または半世紀待たなければならなかったという。<sup>15</sup>そして、富を得、息子をオックスブリッジで教育しジェントリーの外見を整えた彼らは、更なる飛躍を願い、良い血筋を得んが為階層を越えた結婚を望み、名実共にジェントリー化を図ったのである。

このジェントリー同化願望は、当然地主階級への好感情(gentriphilia)を生み出した。<sup>16</sup>自分が特権階級に加わる可能性があるのなら、体制を転覆させるより、それに与みした方が遥かに理に適っていたからである。この心理は体制の安定に多大の貢献をし、仏革命に相当するものが英国に起こらなかった一因とも考えられている。実際チャーチスト運動の嵐が吹き荒れた1840年代でさえ、活動家は革命より漸進な変化を望んだのであった。さらに20世紀に至っては、生産現場や商業を嫌う性癖が経済停滞を生み出した。<sup>17</sup>この様にジェントリー同化願望が、既存の権力の安寧に貢献したことに明らかかなように、階層間の可動性は一見被支配階級に益をもたらしたかのようで、実は支配階級に有利な慣習であった。その他にも産業革命による社会、経済機構の変化に取り残され没落の道を辿る地主階級には願ってもない救済手段であったし、なにより血族結婚の弊害を防ぐという大きな利点があった。連続と続き弾性と生命力が萎えた家系に、上昇志向に燃え活力に満ちた血を注ぎ、肉体的にも精神的にも再度生命力を与え、激動の時代を生き抜くことを可能にさせたのである。この“blood restoration”<sup>18</sup>は、支配階級が可動性のある階級制度から得た大きな収穫であろう。そして労働者階級から中産階級へ、更に地主階級へと出世する可能性を、産業革命が促進したことは想像



に難くない。

中産階級出身のファニーとモリーの出世物語は、まさにこの“blood restoration”の典型と言えよう。なるほど二人が旧家に迎えられたのは財産故にではなく徳によるものであり、そこには地主階級と結婚できるほどの財力に恵まれない中流の女性読者層のジェントリー同化願望が反映されていると思われるが、ともあれ二人の新しい血により、パートラム家とハムリー家はカントリー・ハウスに象徴される伝統精神を保つことができるのである。タナー (Tony Tanner) が “without going outside to the unformed world of Portsmouth for fresh potential, the world of Mansfield Park may wither from within.”<sup>19</sup> と述べるように、マンスフィールドはファニーの新しい血がなくては朽ちるばかりであった。同じことがハムリー・ホールとモリーの関係にも当てはまる。つまりファニーとモリーは、非地主階級の出身ではあるが、新勢力の作り出した都市の文化に汚染されず、地主階級の女性の伝統的徳を備えていたために、旧家の戸主に認められ、その一員となる。エドモンドもロジャーも次男である為に、ファニーもモリーも本家の夫人とはなりえないが、二人により伝統的精神遺産が継承されていくのである。

従ってファニーとモリーの出世物語は、新勢力の攻勢に脅威を覚えた19世紀の人々の喪失感と“Old England”への郷愁の産物である中世主義が、“blood restoration”と融合してできたものであると言えよう。そしてカントリー・ハウスの伝統の継承者として非地主階級の娘が選ばれる作品は数多く存在し、この心理構造が広く浸透していたことを示している。例えばトロロープの『ドクター・ソーン』(Doctor Thorne : 1858), 『フラムリー牧師館』(Framley Parsonage : 1861), 『最後のバーセット年代記』(The Last Chronicle of Barset : 1867), またジョージ・エリオット (George Eliot) の『ミドルマーチ』(Middlemarch : 1871)も変型ではあるがこの範疇に属する。そして驚くべきことに、都市から文学的インスピレーションを得ていたと言われるディケンズ (Charles Dickens) さえも、『荒涼館』(Bleak House : 1853)で下の階級の娘をカントリー・ハウスの夫人に出世させている。<sup>20</sup> ファニーとモリーの出世物語がこの一連の作品の系譜に属するものではない。二人の若く生命力に溢れた新しい血を得て、新勢力の攻勢に衰退の危機に瀕したトーリーの名門は、少なくともカントリー・ハウスが象徴する伝統精神の存続は死守するのである。その意味で『マンスフィールド・パーク』も『妻達と娘達』も、滅びゆく地主階級の伝統と価値観を継承する新

しい血を持った女性を探求する作品と言えよう。まさに両作品は19世紀を代表する時代思潮である中世懐古という去りゆくものへの哀惜の念と、可動性を許容する階級制度が生み出した“blood restoration”という一見矛盾する二つの現象が融合し、文学作品として結実したものである。

注

本稿は日本ギaskell協会第6回例会(1994年6月4日)の講演の原稿に加筆したもので、1994年8月にテキサス大学ダラス校で承認された博士論文(題：“‘The Admirable Woman’ and the Barsetshire Tradition”)の一部を基にしたものである。

1. W.A. Craikはモリーとファニーの類似性を*Elizabeth Gaskell and the English Provincial Novel* (London: Methuen, 1975) 257頁で述べている。しかし、三角関係を形作る三人の性格とモラルは異なるというクレイクの主張(p. 247)は、筆者とは見解を異にしている。程度の差こそあるものの、両作品の3人は性格、身分が対応しているばかりか、その設定により同じ機能を持つ三角関係を作り出しており、それが筋の展開を推進すると同時に作品のモチーフをも支えているからである。
2. Jane Austen, *Mansfield Park* (1814; New York: New American Library, 1979)199. 以後本作品からの引用は全てこの版により、必要ならば引用末尾の括弧内にMPと略記し頁数を記す。
3. A. Fleishman, *A Reading of Mansfield Park* (Minneapolis: U of Minnesota P., 1967) 30.
4. Alistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estate* (Baltimore: The Johns Hopkins P., 1971) 53.
5. Elizabeth Gaskell, *Wives and Daughters* (1864-6; Harmondsworth: Penguin, 1980) 95. 以後本作品からの引用は全てこの版により、必要ならば引用末尾の括弧内にWDと略記し頁数を記す。
6. Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (New York: Barnes & Noble, 1975) 193.
7. Igor Webb, *From Custom to Capital* (Ithaca: Cornell UP, 1981)106. 干ばつに関しては、p.107参照。
8. Richard B. Sheridan, *Sugar and Slavery: An Economic History of the*

- British West Indies, 1623-1775* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1973) 474. Webb p.106 に引用。
9. Ann Banfield, "The Influence of Place: Jane Austen and the Novel of Social Consciousness," *Jane Austen in a Social Context*, ed. David Monaghan (Totowa, NJ: Barnes & Noble, 1981) 41.
  10. ジェントル・ウーマンの伝統的な強さについては、Ann S. Haskell, "The Portrayal of Women by Chaucer and His Age," *What Manner of Woman*, ed. Marlene Springer (New York: New York UP, 1977) を、目下のもの、困窮した者への配慮に関しては、David Roberts, "The Paterfamilias of the Victorian Governing Classes," *The Victorian Family*, ed. Anthony Wohl (London: Croom Helm, 1978) を、又学識の高さ（特にエリザベス一世の宮廷において）に関しては、Doris Stenton, *The English Woman in History* (New York: Macmillan, 1956) 120-50 を参照されたい。
  11. Alice Chandler, *A Dream of Order* (Lincoln: U of Nebraska P., 1970) 12.
  12. David Castronovo, *The English Gentleman* (New York: Ungar, 1987) 12.
  13. Shirley Robin Letwin, *The Gentleman in Trollope* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1982) 8.
  14. Asa Briggs, *Victorian People* (1954; Harmondsworth: Penguin, 1980) 106.
  15. F.M.L. Thompson, *English Landed Society in the Nineteenth Century* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963) 129.
  16. 英国人の *gentriphilia* には、英国では地主階級が大陸の特権階級程寄生虫的ではなく、ノーブレス・オブリージを理想としていたことに加え、企業家精神を持っていたことも貢献しているが、その理由としては長男相続制が挙げられる。財産を相続できない次男以下の男子を自立させるべく手立てを講じたり、娘達に高額の特参金を用意し良縁を結ばせるには、勤勉にならざるをえないばかりか、収穫を左右する小作人の健康状態に留意する必然性が生じたのである。詳細は David Landes, *The Unbound Prometheus* (1969; Cambridge: Cambridge UP, 1989) 66-70 参照。とはいえクロフォード兄妹の様に支配階級の義務を怠った地主も多かったのは言うまでもない。
  17. Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850 - 1980* (Harmondsworth: Penguin, 1981) 127-54.

18. James R. Kincaid は *Doctor Thorne* で描かれている二つの階級の融合を、  
*The Novels of Anthony Trollope* (Oxford: OUP, 1977)114頁で “blood restoration” と称している。
19. Tony Tanner, *Jane Austen* (Cambridge: Harvard UP, 1986) 148.
20. *Doctor Thorne* では労働者階級の母が名門出身の父に犯され産んだ娘が、  
ホイッグの価値観に汚染され没落寸前の旧家の長男と結婚し、財を成し  
爵位を得た母の兄の遺産で婚家を救うと共に、そのトーリーの伝統を復  
活させる。*Framley Parsonage*では、医師を父に、牧師を兄に持つ娘が、  
やはりホイッグの影響を受けトーリーの伝統が腐食しかかっている名門  
に、田園社会の伝統を復活させる。*The Last Chronicle of Barset* では極  
貧の聖職者の娘が、バーセットシャーの “clerical aristocracy” に迎えら  
れ、“blood restoration” の聖職者版となる。*Middlemarch*では差配の娘  
が、怠惰な市長の息子が “respectable farmer” になるのを助け、二人は  
一生幸せにカントリー・ハウスで暮らす。*Bleak House* のヒロインは私生  
児であるが、由緒ある家柄の医師と結ばれ、長閑な田舎の新しい荒涼館  
の夫人となる。このカントリー・ハウスの継承者の資質を問う作品は20  
世紀にも現れ、Forsterの*Howards End*, *A Room with a View*, そして  
Waughの*A Handful of Dust*, *Brideshead Revisited* がその範疇に入れら  
れよう。もっとも、時代が下るにつれ伝統は重荷となり、それを継承す  
る女性像も変容するのは否めない。

Fanny Price と Molly Gibson -

カントリー・ハウスの伝統を継承する

ヒロイン達

Fanny Price and Molly Gibson:

Bearers of the Country House Tradition

東京家政学院筑波短期大学

波多野葉子

Yoko Hatano

Tokyo Kasei Gakuin

Tsukuba Junior College

# 思想の成熟— ギヤスケルにおける保守と革新

小野寺健

「エリザベス・ギヤスケルにおける保守と革新」という題名からは、例の *Mary Barton* の結末をめぐる問題だと思われるだろう—これはそのとおりなのだが、今日はわたし自身が翻訳したり、さいきん再読したりして、つよい印象をうけた他の幾人かの作家の作品とのかかわりで、この問題を考えてみたい。

これは、わたしがいま携わっているフォースター関係の仕事との関わりで、目下いちばん関心を持っている大きな問題である。

わたしにとってのギヤスケルは、何よりも *Mary Barton* で、この作品だけは26, 7歳のときに初めて読んでから3回は読んだが、はじめて読んだときには、最初は重苦しい文章だと思ってやや閉口したのに、ヒロインが出帆しかけている船を追うあたりまでくると、ページを繰るのももどかしく、信じがたい気がするほどのスピードで読めて、じつにおもしろかった。読みおわって心にのこった印象は、大別してほぼ4つあったように思う。それを列挙してみると、1) 作者の物語の才能、が第一。つぎに、当時はまだ左翼的な思想へのいくばくかの信頼があった時代だけに、2) 結末は甘いという感想を抱いたけれども、3) 貧しい生活の克明な描写に、それを上回る強い印象を受けた。しかも、それがあまりセンチメンタルなわざとらしいものでないこともよかったのだと思う。同時に付随的な事実として、4) 悔りがたい素人生物学者という存在も、英国文化の根の深さを思わせる純粋な好奇心の表れとして印象に残った。

この4項目は、おそらく初めてこの作品を読んだ読者の典型的な感想だったのだろうと思う。だが、年月を経て、他の英国作家たちの作品をいろいろ読んだのちの現在の関心は、個人と社会の関わり—というより、生身の人間である個人個人をまず大切にす文化の伝統から生じる、いわば英国文化に

おける「思想の成熟」とでも言えばよさそうな問題に帰着してきた。こういういささか漠とした、大きすぎるかもしれない視点に立つと、*Mary Barton* のとかく論議の種になる結末に集約される、構成上の不整合という問題についても肯定的に考えられるようになる。この点を話の大枠としたい。

それは、考えてみると長いあいだ醜酔しない形で頭のなかに漠然とあった「ギヤスケルと英国小説の伝統」と言い換えてもいい問題で、これはたしか以前近藤いね子先生がこの会でお話しになったときの題である。

そこで、この視点についてももうすこし説明すると—

英国では、革新的な思想—一般社会の人びとからは過激とさえ見える思想—が、保守的な好み、趣味、感覚といったものと共存していることが多く、それがべつに異とされな—その理由はなぜか、なぜこういう現象が起きるのかといったことである。

社会の理念についての思想、つまり社会思想という点では革新的で、公の発言、つまりその人の「思想」と言われたり見られたりしているものは革新的でも、漠然とした人間観とか自然観となると伝統的・保守的の—思えない場合が英文学にはあまりにも多い。

その例としてわたしの頭にうかぶのは、ジョージ・エリオット、フォースター、D.H. ロレンス、オーウェル、レイモンド・ウィリアムズといった人たちである。

言うまでもなく、ジョージ・エリオットはまず同棲生活を選んだ生き方自体が当時の社会では革新的・衝撃的だったわけだし、主な作品の主題であるフェミニズムの思想も当時は新しかった。性について新しい思想を打ち出したロレンスの過激さは指摘するまでもないし、フォースターにしても今から見れば穏やかな紳士そのもの—のようだが、登場した当時は同世代の仲間たちの例にもれず反ヴィクトリア朝の旗幟鮮明な作家だった。彼は、たとえば *A Room with a View* では、ヒロインのルーシーに、価値観が明白で、したがっていわばそれなりに信用できる人生観の持ち主であるフィアンセのセシルを棄てて、冷静に考えてみるなら海のものとも山のものともわからない、ただ本能や直観に素直なだけかもしれないエマソン青年を選ばせるという、観念的な構成を選択している。オーウェルに至っては、ほとんど政治的な作家としか見られていなくて、共産主義への同調の問題がいちばん問題の作家だ—という驚くべき見方が、いまだに世間では横行している始末である。大筋でその衣鉢をついだと見られるレイモンド・ウィリアムズ(1921～88)の場合

は、いわゆる新左翼の理論的指導者で、その思想が革新的であったことは言うまでもない。

ところがこういう人びとの、具体的な個々の人間の見方とか自然観となると、あくまでも英国文化の伝統に忠実で、まさに伝統的としか言いようのない自然観が少しも異とされない。オーウェルの『1984年』にも、全体主義体制の禁を犯して恋人同士がデートする場面があって、そこに見られる自然観は完全に伝統的なものだし、レイモンド・ウィリアムズが自分の育ったウェイルズとの境に近い故郷の田園生活、とくに主人公が父親の伝統的な生き方によせる思いについても同じことが言える。そして、複雑な矛盾をかかえている登場人物たちは、いかにも人間的なふくらみに富み、人間関係の機微についての観察も伝統的な風俗小説のそれと変わらない。つまり、あくまでも個人の細かな性癖とか、誠実な心への関心が中心で、その観察の細かさには感嘆するというより、時としてうんざりさえさせられるのだ。だが、オーウェルの『動物農場』と『1984年』の魅力が、じつはそういう伝統的な観察力・描写力、あるいはもっと根本的な「好み」がそのままこまれている点にあることは明らかである。これは、たとえばピカソの抽象画の魅力が初期の作品に歴然と見られるデッサン力、というより要するに持って生まれた「画のうまさ」にささえられているのと同じではないだろうか。つまり、英国の文学では、社会思想とか—これはまだ触れていない点だが—作品の技法とはかかわりなく、つねに揺らぐことのない、国民に共通の伝統的な人間観・自然観が根底にあって、それが英国文化の優れた特殊性になっているように思われる。それを経験主義の伝統という言葉で置き換えることもできるかもしれない。

こういう、一見非論理的に見えるあり方—建前ではむすびつかないはずの伝統的な人間観や自然観と、革新的な社会思想の共存—は、論理的一貫性に固執する日本では、恥だとか、少なくともみっともないと思われかねず、作家当人も照れるし、世間のほうでも指摘しては大人げないと思ってあいまいにされる結果、個人的ゴシップにとどまるのだろう。ところが英国では少しも不思議とはされず、違和感なしに通用するらしいのはなぜか。

こういうあり方こそ、「思想の成熟」とでも言うべきなのではないかと思う。そしてだからこそ、日本とちがって、英国では共産主義が一度も広い人気を博することができず、majority になりえなかったのではなかろうか。言い換えれば、純粹に観念的な思想は信用されないのである。つまり、肉体を

捨象した人間像や、矛盾に富む現実を無視した観念的主張にとどまる「思想」と称するものは、英国人の国民性にはなじまず信用されないのであって、これが経験主義の伝統なのだと思う。英国人は、理論としては一貫して美しくて、現実から遊離した、したがって不毛で危険な思想を、しばしばフランス文化のなかにみとめて、とかくフランス人を頼りないと思い、嘲笑したがる。抽象的な観念と伝統に根ざした具体的な日常経験とが結びついたものが健全な人生観なのは自明のこととされているのではないか。だが、それこそ有効な「思想」の名に値するものであって、こういうあり方を「思想の成熟」と呼んでもいいのではないかと思うのである。

その辺りで、ギヤスケルに登場してもらおう。

まず引用したいのが Raymond Williams: *The Country and the City* (1973)である。彼はこのなかで *Mary Barton* にふれて、次のように言っている

ディケンズと違ってギヤスケルは、工業生産と有力な市場が決定的な特徴となっている都市、ロンドンとはまったく違って、新しく厳しい階級間の戦いの言葉が存在する都市の作家でもある。『メアリ・バートン』は、階級闘争が人間におよぼす影響を、混乱はあるにしても非常に深いレベルで描きだしている。(下線部筆者)

まずこう言った彼は、ギヤスケルが、労働階級組織の力の表現は抑えているものの「必然的な階級意識の世界にここまで入り込むことができ、なおかつ、組織的な搾取によってこうした新しい思考法を学ぶことをやむなくされている個々の人間との接触を決して失うことがなかった点は、まことに印象的であり、本当の根本的な変化の印である」(山本和平・増田秀男・小川稚魚訳、『田舎と都会』晶文社、1985、P.293)と言う。

要するに「資本家階級による搾取に追いつめられて、労働者階級として団結せざるを得なかった人びとの意識の深層まで描いていながら、依然として彼らを個人として捉える視点を失っていない」ということであり、そうやってはじめて、社会の本質的な変化についての認識が成立してきたと言えるということである。

そしてこの「個人として捉える視点」こそ、まさにレイモンド・ウィリアムズの視点なのである。彼は出世作 *Culture and Society* (1958)と、*The Long Revolution* (1961)という2冊の評論と一体をなす、自伝的な小説



*Border Country* (1960)で、ウェールズとの境に近い小さな炭鉱町に生まれた彼自身を思わせる秀才の少年の人生を描いた。主人公の少年は奨学金のおかげでケンブリッジに進学して経済史学者になり、いわば出世をしたのに、故郷の一鉄道職員である父の生き方への関心を棄てることができない。いつまでたっても、父の生き方と自分の生き方を比較して、人生の意味について考えつづける。

ウィリアムズがあえて小説という形式に挑んだのは、二つの評論で用いた社会科学的な記述では描けない、一人の人間のなかで統合される「経験」というものの実態を捉えるには小説の形をとるしかなかったからである。

個人の意識のなかでは、明晰な観念では整理しきれない矛盾する価値観が微妙に混じりあっているのに、それを無視した、理論的には一貫していてもきれいごとになる論理では、人生ないし経験はとらえきれないことを、彼は痛感したのだった。

ただし、ウィリアムズは小説の効用だけを強調するわけではない。つまり、個人的側面の重要さだけを強調しているのではなくて、もっと総合的に、文化というのは社会的視点からだけでも個人的視点からだけでも捉えることはできず、現実にはこの二つの要素は一人の人間において複雑にからみあって統合されているのであり、これを分けるときには文化は頽廃すると考えるのである。そして、さらに、この統合を実現させるのは「共同社会」であるとして、こういう共同社会の姿を描いた初期のD.H. ロレンスを高く評価するのである。だが、このロレンスも、『虹』を分岐点として、ここで共同社会が崩壊すると、以後は人間関係を抽象的にあつかうようになったと、ウィリアムズは考えている。

この考え方にしたがえば、*Mary Barton* のとかく批判されがちな結末は、要するに社会的視点と個人的視点のバランスがわるく、個人的視点に傾きすぎていくことになる。だが、ウィリアムズ自らが小説によって、評論における社会的視点への傾斜という欠を補おうとしていることを考えても、*Mary Barton* の結末が個人の視点に収斂するのは妥当と言えるかもしれない。

もしギヤスケルが階級間の対立にもとづくイデオロギー闘争といった社会的視点を持ち込んでいたなら、抽象的・観念的な議論を展開せざるをえず、むしろ空虚な印象さえあたえる結果になったのではないか。イデオロギーでは所詮ほんとうに人を納得させることはできず、最終的な解決が得られるとは思えない。ギヤスケルが自分の所属する中産階級の思惑に遠慮して解決を、

キリスト教的な立場に委ねたのかどうかはともかく、個人的レベルに視点を据えてこそ追及できる複雑な矛盾をはらんだ人生の現実を描くことが小説の役割なのであって、こういう矛盾した現実の姿をどこまでの確に掘りさげているか—その深さが小説の価値を決めるのだと言っているであろう。

まさにこういうイデオロギー的倫理の無力を証明し、人間関係における倫理を超えた感情の力を歌いあげている優れている英国小説の典型として、ここでぜひ引き合いに出したくなるのは、現代のMargaret Drabbleの代表作*The Millstone* (碾臼)である。

『碾臼』には、進歩的文化人の娘に生まれた若い女性英文学者Rosamund Staceyが、自分では父のような偽善者とはちがう本当の意味で進歩的・解放的な女性だと自負しているのに、人生の現実のさまざまな矛盾に遭遇して解決できずに思い悩む深刻な問題が、ユーモラスな観察をまじえて詳細にしかも痛快なテンポで一このトーンが大事で、それがメッセージそのものになっているのだが—描かれている。

たとえば、ロザマンドには原子力研究所の研究员と結婚して研究所の側で暮らしている姉がいるが、この姉は子供の躰をめぐって悩んでいる。幼い娘の友達に研究所の用務員の娘がいて、その子が卑猥な言葉を口にしたりトイレの中で遊びたがったりするので、姉は自分の娘とは遊ばせたくないのだが、その用務員の子には他に友達がいらない—他の親たちは子供たちをその子に近づけない—ので、かわいそうでそうもいかない。そもそも自分自身が親から受けた教育では、こういう差別は許されないのである。しかし、自分の子とその子と遊ばせれば、自分の子自身が他の子と遊べなくなってしまう。この矛盾をどうすればいいか。姉妹そろって考えても解決策はうかばない。

もう一つさらに印象的な、この小説の終わりに近いところであって最大の山になる、主題をめぐる結論と言っていいエピソードにふれておこう。

ロザマンドが生んだ子供Octaviaは心臓に先天的欠陥があって難しい手術を受けるのだが、そのあとでわが子の様子を見たいと言ったロザマンドは看護婦長に拒絶されると大声でわめいて騒ぎをひきおこし、婦長を屈服させるという思い切った真似をして特権を獲得する。だが、彼女はこの特権に後ろめたい思いを棄てきれない。しかしある日、自分以外にも同じ特権をあたえられているらしい上品な婦人を見かけると、彼女はその婦人に声をかけて、どうやって特権を得たのかと訊き、夫の顔を利用したのだという話を聞き出

す。そこからが見せ場なのだが、ロザマンドは躊躇したものの自分の最大の関心事について訊かずにはいられず、「他の、そういう特権を持っていない人たちにたいして気がとがめないか」と尋ねる。すると婦人は一はじめは気がとがめた。しかし、そのうちに、特権を持っていない人たちは、わたしほど傷つきやすくないのだろう、気にしていないのだろうと思うことにしたと言ってから、すぐ、「でもそうじゃないのよね」とつけくわえる。それでも、あの人たちも悩んではいても、わたしのような手を打とうとはしないのだと自分に言い聞かせ、さらに、けっきょくわたしとは関係ないことだと考えようとしたが、それも違うと思ひ悩む。しかし最後には「わたしの心配事は、わたしの心配事だ、そこまですべて終わりだ」という結論に到達したのだ。「わたしはまず、自分と子供のことを考えなくてはならない。他の人は自分で自分の面倒を見ればいいのだと思うようになった」と言う。

だが、この小説の主題は、この告白を聞いたロザマンドの感想によって明らかとなる。ドラブルはロザマンドに次のように言わせている。

彼女の話は終わった。それ以上言うことはなかったのだ。わたしはどうしようもなく、涙がこぼれそうなほど感動していた。わたしのあの問いにこういう答えをする人はめったにいないのだ。彼女の話し方には、すこしも苛酷なところがなかった。それが一番わたしを感動させたのではないかと思う。こういう見方自体なら、何度でも聞かされることがある。しかし、それまでの経験では、かならず、こういう見捨てるほかはない人にたいする後ろめたそうな笑いか、無知な人間にたいするトーリー的なさばさばした軽蔑とか、いかにも高慢な、現実主義的でわりきった実務家的な冷淡さ、こういうものがつきものだったのだ。不幸な運命から生まれた結論らしく、こういう風に静かに語られるのを聞いたのは、これが初めてだった。わたしには彼女の本当の気持ちがあった。彼女が、ほかの人、という言葉の意味があった。(拙訳 河出文庫、P.212)

ロザマンドには、人生には、父から教えられた社会主義的な正論では解決できないことがあまりにも多く、それを乗り越えられるものは、いわば「心」だけなのだと言ったのである。彼女にそう納得させたのは、相手の理論ではなく口調だった。話し方に漂う雰囲気だった。言葉あるいは言葉になりうる論理を超えたものだったのである。わたしが『礪白』を訳そうと思ったの

は、この箇所のでせいだったと言っても過言ではない。

いわゆる正論の虚しさを衝いている点で、このエピソードはフォースターの思想を要約したエッセイと云っていい「私の信条」を想起させる。周知のように彼はこのエッセイで「わたしは絶対的信条というものを信じない、そういうものはこれまでの歴史で多くの犠牲者を出してきた」と主張し、国家をふくむあらゆる組織よりも個人と個人的関係を重視する立場に固執して、この世での人間関係にとってはせいぜい「寛容」という徳以外には有効な原理はないと言っている。だが、フォースターについては比較的良好に知られているだろう。そこで、もう一人、同じように個人に執着してイデオロギーのいわば雑駁さをつよく主張した作家としてとりあげたいのは、ジョージ・オーウェルである。彼はフォースター以上に正面から、政治的スローガンの虚しさを批判しているからである。

その典型的な例として、有名な評論「鯨の腹のなかで」の、オーデンの「スペイン」という詩をを引き、その「模範的党员」の一日をスケッチした一節にふれて、そこにふくまれている「やむをえぬ殺害」という無神経な言葉めぐる浴びせている批判は、個々の生身の人間をめぐるイデオロギーの無効性を生々しく指弾したものとして、きわめて興味ぶかい。彼は言う。

こんな言葉が書けるのは、殺害がせいぜい言葉でしかない人間だけである。わたしなら、こんなに軽々しく殺害を口にするようなことはしない。それはたまたま殺害された人たちの死体をたくさん見ているからだ一戦死ではない、殺害された人の死体なのである。だからわたしには殺害とはどういうことなのか多少はわかっている一恐怖、憎悪、泣き叫ぶ肉親、検死、血、死臭というものが。わたしなら、殺害は何とか避けたい。ふつうの人間は誰でもそうなのだ。大小のヒトラーやスターリンたちは殺害をやむをえないものとする。だが、この人びとは自分の冷酷さを宣伝したりはしないし、殺害という言葉も口にしない。「清算」とか「粛清」といった聞こえのいい言葉を使うのである。オーデン氏的な道徳欠落症は、いざ引き金がひかれるときにはかならず現場にいない人間だけに生ずるのだ。左翼思想には、火が熱いことさえ知らない人間の火遊びのようなものがあまりにも多い。(拙訳 岩波文庫『オーウェル評論集』、P.192)

これこそ、最初期のエッセイである「絞首刑」や有名な「象を撃つ」に始

まって、最晩年まで一貫している、オーウェルの究極の立場を語ったものである。そして『1984年』では、この立場にもとづいて個人の思想を支配しようとする全体主義体制が、ひいては思想の基盤となる感情まで支配しようとして、個々人のアイデンティティの最後の拠り所であるセックスさえ管理し、新しい人工用語を開発して「個人」という概念そのものまで抹消しようとする未来社会を描いたのだった。

そこで、さいごに自然観の問題をとりあげたい。オーウェルの『1984年』で、こうした全体主義制度に対して個人の自由を支えるものとして、伝統的な視点から描かれている自然—あるいは田園—が印象的だということについてはすでにふれた。その点については、現実の『1984年』が迫ったころ世界中でこの作品の予言の正しさについての再検討が行われたときに、アメリカの批評家 Irving Howe も、この作品の意外な魅力として保守的な田園描写ひいては自然観をあげていたのが印象的だったが、オーウェルはそもそも骨董や、動物や、日曜大工を、古風な田舎のパブを愛し、「なぜ書くか」というエッセイでは「平和な時代に生まれていたら、田舎の牧師にでもなって、永遠の運命について説教し、庭のクルミの木が育つのを眺めて暮らしていたかもしれない」とさえ言っているのである。だが、ここでは、オーウェルについてはその程度にとどめて、冒頭で名をあげた作家のなかからもう一人、ジョージ・エリオットの自然観に触れて、結論らしいものとしたい。

自然観にこだわるのは、革新的な思想と伝統的な自然観の共存という事実にとだわらざるをえないからだが、ギヤスケルの場合も田園ものと言われている諸作品の描写はもとより、*Mary Barton* の場合も冒頭の *Green Heys Fields* の描写がきわめて印象的だという事実が頭にあることはいうまでもなく、その意味については多言を要しまい。

この問題にあらためて興味を抱くようになったのは、前述のウィリアムズにつよい印象を受けたのに続き、ロレンス、フォースターなどの関わりから *The Story of My Heart* を書いた Richard Jefferies (1848-87)、事実ロレンス、フォースターに大きな影響をあたえた社会主義者 Edward Carpenter (1844-1929) といった人びとの自然観の伝統に関心を深めていた矢先に、最近 *The Mill on the Floss* をひさびさに再読する機会があって、その自然描写に遅まきながら深い感銘をうけ、いまさらのように英国文化の伝統について考えさせられたからである。

以前読んだときには退屈さに耐えられなかった *The Mill on the Floss* が、

いまになって読んでみるとじつにおもしろいのだが、その要因はどうやら二つあるように思う。一つは風俗描写で、家庭生活や、親戚同士の関係などの描き方がじつに辛辣でおもしろい。これは以前のように端的な議論ばかりもとめて読んでいたときには理解できないことだった。そして、もう一つが自然描写あるいは自然と人間の魂が一体となっているあり方の描写なのである。たとえば、第5章の終わりに近く次のような絶唱と言っている箇所がある。

There was nothing to mar her (Maggie Tulliver) delight in the whispers and the dreamy silences, when she listened to the light dipping sounds of the rising fish and the gentle rustling, as if the willows and the reeds and the water had their happy whispering also . . . .

They trotted along and sat down together with no thought that life would ever change much for them: they would only get bigger and not go to school, and it would always be like the holidays; they would always live together and be fond of each other, and the mill with its booming — the great chestnut-tree under which they played at houses, their own little river, the Ripple, where the banks seemed like home, and Tom was always seeing the water-rats, while Maggie gathered the purple plumy tops of the reeds which she forgot and dropped afterwards, above all, the great Floss along which they wandered with a sense of travel, to see the rushing spring tide — the awful Eagre — come up like a hungry monster . . . .

英国人なら、おそらくここを読んで戦慄さえ覚えるのではないか。ここで延々と、まるで絵の具を厚く、塗りがさねるようにして描かれている自然の思い出、自然にたいする感覚こそ、英国の保守本流の精神の基盤なのだと思うにいらなかった。だれもが気がつくのは、自然にたいするこの愛は過去—先祖代々受けつがれてきた遺産と言っている思い出—にたいする愛と一体だということである。自然への愛に潜在する過去の共通の記憶—それは時代を貫通し、階級的区分を超えて人々を結びつける。それが伝統なのである。この伝統は *Mary Barton* では古謡の記憶となり、*Job Leigh* という人物となって現れている。こういう変わらざるものへの愛着こそ、英国精神の根底にちがいないのだ。

エリオットも、事実、今の絶唱につづけて、「既知のものへの愛着」についてこう語っている。

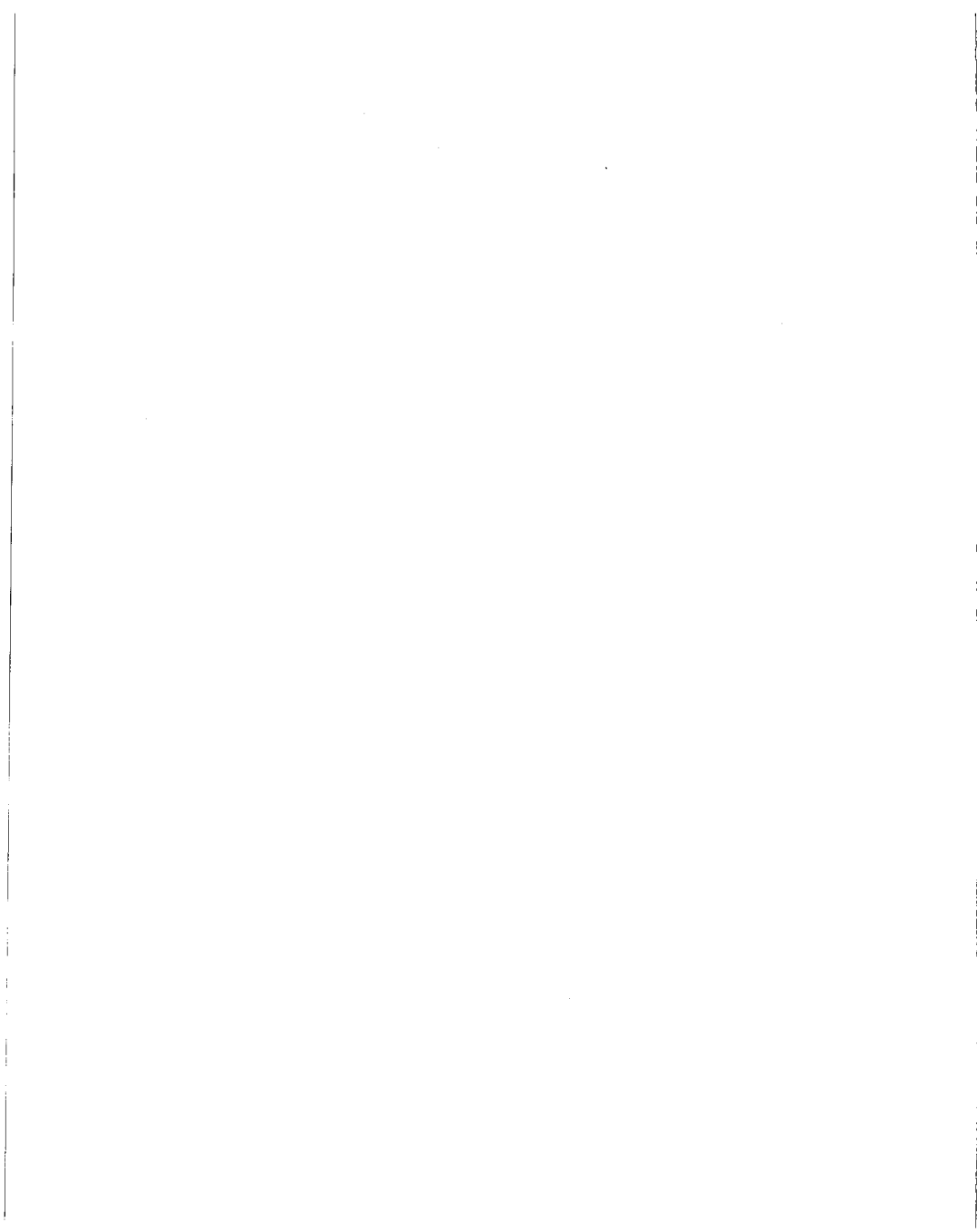
What novelty is worth that sweet monotony where everything is known and loved because it is known? (イタリックス、筆者)

話は一挙に冒頭に述べた結論へと急ぐことになる。つまり、英国で革新的な社会思想と個人的愛情とが違和感なくむすびつき共存できるのは、根底に、時代を超え階級を超えた自然へのこういう愛という共通の精神的伝統があるからではないか。それが、人間関係を媒介しているのではないか、ということである。

*Mary Barton* では、中心主題の重さゆえに自然への愛は脇に押しやられ、ギaskellの生来の物語の才能が、むしろやや性急に発揮されて、階級間の生活の格差と戦いという局面が印象にのこるが、7年後の *North and South* になると、人生の多面的な構成要素を丹念に拾い上げた描写も全体の構成もいちだんと成熟して、ギaskellの作家としての成長を思わせる。

人生と自然のかかわり合いという問題をめぐっては、イシグロの *The Remains of the Day* にもふれたくなるし、それよりも当然ワーズワスなどの名が出てくるはずである。だが、これ以上話を散漫にしないためには、この辺りで一応止めるべきだろう。

(1994-10-16・ギaskell協会大会講演)





# 『クランフォード』について

## (Cranford)

松本智美

[はじめに]

エリザベス・ギヤスケルが少女時代を過ごしたナッツフォードをモデルとし、未亡人や中壮年の婦人達にふりかかる出来事をエピソード形式に語るこの作品では、どのページを読んでも顔が綻び、またその同じ顔に自然に涙が伝うのを覚え、すぐにまた口元がくすっと笑ってしまうのは誰もが経験するところである。

物語は16章から成るが、実際『クランフォード』は、ディケンズ編集の『家庭の言葉』に、8回にわたって掲載されたものである。このため、エピソードの繋ぎ合わせのように感じるのとは否めない。しかし、その一方で、このスタイルは、限られた時間で執筆活動を強いられた作者には理想的な形式であったのも事実である。

ややもすると、社会問題作家としてのレットルを貼られがちのギヤスケル夫人であるが、『妻たちと娘たち』と並び、この『クランフォード』が、作者の真の個性と鋭い洞察力の顕著な表現において高く評価される所以を、描出の特徴と、作者がCranfordianに託したものは何なのかということを探りながら検証してみたい。

### 1. クランフォードの日常と非日常

… and talked on about household forms and ceremonies as if we all believed that our hostess had a regular servants' hall, second table, with housekeeper and steward, instead of the one little charity-school maiden, whose short ruddy arms could never have been strong enough to carry the tray upstairs, if she had not been assisted in private by her mistress, who now sat in state, petending not to know what cakes were sent up, though she knew, and we knew, and she knew that we knew. and we

knew that she knew that we knew, she had been busy all the morning making tea-bread and sponge-cakes. (p.3)

ミセス・フォレスターが、その小さな家でささやかなパーティを開いた際の有名な一説である。暗黙のうちに、徹かにとり行われるパーティでの微笑ましいしきたりが、ギヤスケル夫人ならではの精巧な描写とリズムカルな筆致で描かれ、読者をユーモアたっぷりの世界にひき込んでいく物語の最初のエピソードといえる。このようなごく日常的な話題が作品全体にふんだんに盛り込まれている。

小説において、ある特殊な空間を提示する場合には、人間にまつわる生老病死、冠婚葬祭等の事件も描かれるのが普通である。『クランフォード』においても、女性に占拠された町とはいえ、冠婚葬祭といった事象が、時として話題になり、このたいくつなほど穏やかに過ぎていく日々において、住人たちの大いなる興味をかきたて、しばらくは、茶飲み話の話題となるのだ。ブラウン大尉と、その娘の死、手品師シニョール・ブルノーニ来訪のお祭り騒ぎ、ホギンズ医師とグレンマイア男爵夫人の階級を超えた結婚などは、その代表的な例である。

町に手品師がやってくる前日の婦人たちの様子はといえば、話題は奇術、呪術、幽霊へと広がり、果ては百科事典で奇術を解明しようと予習までする始末である。

クランフォードの非日常は、このように日常生活の中に入り込んで、ほのぼのと続いていく。ナッツフォードを一度でも訪れたことのある方にとって、このクランフォード流の静かな生活を川のほとりに、ヒースの向こうに想像するのは、現在でも難しくないことである。

## 2、描出の特徴

作品の語りには、メアリー・スミスという女性によって行われる。以下にシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を参照しつつ考察してみよう。

### a) 『ジェーン・エア』

孤児同然の少女の若い頃の物語を、年老いてから、本人が回想するという形で描かれるのであるが、その作品世界には、落ち着きを感じられる。シャーロット・ブロンテは、一人称形式の小説の視野の限界の発生を、「読者」という単語で、呼びかける事において未然に防ぐことに成功している。

Perhaps you think I had forgotten Mr. Rochester, reader, amidst

these changes of place and fortune. Not for a moment. His idea was still with me, because it was not a vapour sunshine could disperse, nor a sand-traced effigy storms could wash away; it was a name given on a tablet, fated to last as long as the marble it inscribed. (CHAPTER XXXIV, p.546)

And, reader, do you think I feared him in his blind ferocity? If you do, you little know me. A soft hope blent with my sorrow that soon I should dare to drop a kiss on that brow of rock, and on those lips so sternly sealed beneath it; but not yet. I would not accost him yet. (CHAPTER XXXVII p.592)

Reader, it was on Monday night – near midnight – that I, too, had received the mysterious summons: those were the very words by which I received to it. I listened to Mr. Rochester's narrative, but made no disclosure in return. …

(CHAPTER XXXVII p.614)

～『ジェーン・エア』研究社 ENGLISH CLASSICS 1928より～

最初の呼びかけでは、控え目な様子であるが、物語が佳境に入り作者の筆がのってくると、Reader～とその関係が確立されている。読者を引き込み、作品に広がりをもたせ、客観性をも加えている。

b) レポーター、メアリーの役割

『克蘭フォード』は、全体にラベンダーや、プリムローズの香りがまろやかに漂ってくるようでもあるが、その中にひばりが高く高く舞い上がるような明るく軽快な歌声も聞こえてくるようである。これは、まさに語り手メアリー・スミスの作り出す魅力といえよう。

ジェラン女史も、『克蘭フォード』と全作との声質の違いを指摘し、コントラルトではなく高く歌い上げるソプラノとなっていると述べている。

… The change of style between such a story as ‘John Middleton’ and “Cranford”, which began to appear exactly a later in the December 1851 issue of ‘Household Words’, is like the change of voice in a singer who has consistently misplaced her powers and suddenly finds she is no

contralt but a soaring soprano. Winifred Gerin, Elizabeth Gaskell (1980)  
(p.119)

この高いソプラノのトーンは、若いメアリー・スミスだからこそ成し得るものであろう。

メアリーは、章が進むにつれて明確になるが、20代の若い女性であり、大産業都市ドラムブルと克蘭フォードを行き来する資産家の娘である。彼女はまるで現代に置き換えれば、宛ら各地の情報を伝える若い美人レポーターのようである。ギヤスケル夫人は、ヴィクトリア朝にあって、既にこのような新鮮で軽快なレポーターを克蘭フォードに派遣、また駐在させていたのだ。

彼女の若さは、克蘭フォード全体に流れるユーモアやペーソスを巧みに操る上で大変な効果を発揮することになる。若さが語りに余裕をもたらし、痛快なリズムで描かれるエピソードに読者は自然に微笑み、涙する。若いメアリーの余裕は、ユーモアを語るには不可欠な条件であるが、彼女は、人の話を聴くという柔軟性をも持ち合わせており、これもレポーターにとっては重要な資質である。彼女はミス・マティーや克蘭フォードの人々の話を優しく受けとめ、また、可哀そうな魔術師サミエール・ブラウンの妻のインドとその帰路での苦勞話に大になる慈悲の心で耳を傾ける。結果として、親切なアガ・ジェンキンズが、ピーターではないかという推論まで立てるのである。

つまり、メアリーは、若いということに加え、バランス感覚の優れた女性であるともいえる。彼女は、ドラムブルと克蘭フォードの間で、克蘭フォードの女性達の間で、そして、作品世界と読者の間で、常に客観的に語れるナレーターなのである。ドラムブルにおいては、その産業資本主義の社会を肯定しているわけではないし、克蘭フォードにあって、ただ女性達に同情するのではなく、時代遅れのファッションやしきたりを滑稽に感じる公平な視点を持ち合わせている。

産業革命のあおりによる銀行の倒産で、ミス・マティーが破産した折りにも、メアリーは父親との共同作業で、マティーの家計の立て直しを算出し、彼女を救う公正な会計士と化す。

メアリー・スミスのナレーションにより、作者は、ある時はパノラマのレンズで作品全体を生き生きと映し出し、またある時は、顕微鏡のレンズの

ようにズームした視点で自由自在に微に入り細に入り筆を走らせる事ができたのである。シャーロット・ブロンテが、一人称の語りの中で読者を呼びかける事で創造した作品の広がりや、ギaskell夫人は、語り手(レポーター)メアリー・スミスの起用により、成し遂げているのである。とりもなおさず、このメアリー・スミスのバランスのとれた資質は以下に指摘される通り、そのままギaskell夫人に備わったものであった。

With Mary Smith Mrs. Gaskell achieved a considerable advance in her persona method of story-telling. Explicit and obtrusive authorial comments find no place in Cranford: whatever autobiographic remarks Mrs. Gaskell makes appear wholly in keeping with this character who could say, as could Mrs. Gaskell herself, 'For my own part, I had vibrated all my life between Drumble and Cranford' -

'Manchester and Knutsford' in other words.

John Geoffrey Sharps, Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works (1970) (p132-133)

### 3. キャラクター

ギaskell夫人が各々の登場人物に託そうとしていたものは何であろうか？

Professor Martin W. Sampson says most truly that when people talk of Hawthorne or Henry James, they incline to examine the motives of the characters, or to discuss the conduct of the plot, but when they talk of Cranford they ask, "Do you remember the place where So-and-so does this or that?" and never tire of recalling favorite scenes and characters.

Gerald Dewitt Sanders, Elizabeth Gaskell (p.45)

夕食に、かきとチェリーブランデーを出すミス・パーカーは、元商店主で、少しばかり言葉や態度が大げさなくらい丁重で、足にフランネルを着せた牛の話で有名であるとか、ティレル家の末裔であるフォレスター夫人は祖先がロンドン塔で王室の王子を殺害しているためか、幽霊が怖いとか、高慢なジェイミスの奥様は、夕食にサヴォイビスケットを出しても自分が出せ

ばみんな食べるだろうと思っていたり…。ギヤスケル夫人は、一人一人の台所、居間、寝室、果ては財布の中味まで我々に紹介してくれるため、各々を実に身近に感じさせる。個々のキャラクターの生活ぶりを、彼女独特の細かい視点と筆致で詳細に描いてみせながら、一方で当時の社会情勢をも暗示しているようである。

例えば、ブラウン大尉については、年金暮らし陸軍大尉で、町が反対する鉄道会社に職をおいたと説明し、産業革命初期のストライキ等を想像させる。作者の本意でなかった彼の死も、その原因は皮肉にも鉄道事故によるものであった。ともあれ、負けず嫌いで見栄っばりのミス・ポールについても、高慢なジェイミソンの奥様についても、どこかに人間的な笑いの部分を残しながら描かれ、読者は同情し、笑い、「誰々のあの場面覚えてる?」となってしまふのだ。

#### 4. 慈救の輪

##### a)、住人たちの連繋

保守的、排他的で有名な英国人は、伝統の中に驚異的に新しいものを取り入れてみたりする。世界に誇る王室においても、新風を巻き込んだり、女性の首相をいち早く選出したのも英国であった。クランフォードの人々も保守的な中年の婦人達であるが、彼女達なりの方法でお互いに影響を与え合いながら、知らず知らずのうちに、進歩的思想を取り入れ彼女達なりの納得の仕方ではあるが、それらを消化していくようなのである。

特に階級については、初めの部分で紹介されるミス・バーカーの行われたパーティーで招待されているのは、ジェイミソソ夫人、ミス・マティー、メアリー、ミス・ポール、フォレスター夫人の五人で、彼女達より実際は裕福であっても階級的に素性の知れない未亡人フィッツ・アダムズは無視されていた。階級に対する彼女達の偏見は、名門貴族のレディ・グレンマイアのクランフォード来訪の章でますます顕著に描かれる。男爵夫人の滞在先のジェイミソソ夫人は、交際の範囲を限定しようとするのだが、その態度に腹をたてたミス・ポールはこちらの方からお断りとばかりに、ミス・マティーや他の人をも巻き込んで、ジェイミソソと交際しない事に決める。レディ・グレンマイア歓迎のパーティーの招待状をジェイミソソ夫人から受け取った時にも、ミス・ポールはいち早くマティーの家へ相談に行くが、結局参加する事に決める。彼女の見解とは、「上品さを売りものにしてている我々にとって、些細な事で腹をたてていると思われたくないから」と言うが、実のところ彼

女は、帽子を新調してしまっており、それを見せたかったからなのである。

パーティに参加してみると、新調した帽子や、ありったけのブローチで飾った服を着て、特に緊張してパーティーでの上品なしきたりを励行していた Cranfordian の予想に反してレディ・グレンマイアは、質素な服装で現れたスコットランドなまりの気さくな婦人であった。そして、次の四つの点で彼女達の絶大なる支持を得たのであった。

- ①腰を下ろすために助け船を出してくれる。
- ②お茶の催促のために 呼鈴を鳴らしてくれる。
- ③バター付きパンの追加を頼んでくれる。
- ④カード遊びを見事にやっけてのける。

①～③は、クランフォード流の上品なパーティー術を覆す行動であったわけであるが、彼女の手柄の前に全員屈服してしまったのであった。

こうして、階級についての偏見の思想を少しずつ克服していった婦人達の親交は、密度の濃いものとなり、クランフォードの真の美德である親切心の連繋プレーを発揮していく。行方不明だったマティーの弟、ピーターの帰還は、このような婦人達の前向きな努力の過程にもたらされる天使からの報酬であったといえる。もちろんメアリー・スミスの大胆な行動が功を奏したものであったが、ミス・マティーの破産においても、クランフォードの人々の善意は、溢れる如く注がれたのである。

#### b). ミス・マティーの覚悟

しかし、何と言っても、ミス・マティーのどこまでも清らかな人格は、破産という逆境において更に輝きを増して描かれ、この作品に永遠に輝く光を与えている。姉の生前は、すべてを姉の意見に従い、結婚までも不意にしてしまった弱い女性のようにであったマティーは、無一文となってしまう銀行倒産の事実の前で、誰のせいにもすることなく不平を言わぬばかりか、銀行の人に同情し、姉が生きていなくて良かったと思う。更には、なけなしのお金まで人に与える事を断固主張するのである。まさにここでは、自分の信念を貫く強い意志が窺われ、覚悟の美しい精神を感じる。この覚悟は、「神の前で何が正しいか悟ること」である。メアリーもこう語る。「自分の境遇の変化にふさわしい緊縮にさっそくとりかかった覚悟のよさは、私にも、他の人にもお手本となったのです。」<sup>71)</sup>と。

ミス・マティーのこの精神は、帰還した弟ピーターの機知機転にとんだ尽力も手伝い、他の住人にも波及していくことになる。そして、階級を超

えたホキンズ医師とレディ・グレンマイアの結婚も皆に受けいられる事となり、クランフォードに真の平和が訪れるのである。

〔結び〕

「一人の悟りは、万人を救う」の理を、ギヤスケル婦人は『クランフォード』の中で実証しているとはいえ、ミス・マティーの清らかさがクランフォード全体を清浄なものとし、そこから波及した住人の連繋によって平和がもたらされたのである。

メアリー・スミスが作者のペルソナと評されたが、クランフォードの平和の使者達—ミス・ポールの好奇心や決断力、レディ・グレンマイアの優しい人柄、そしてミス・マティーの清らかさ—その1つ1つに、ギヤスケル夫人の魂を感じてやまないのである。

引用文献

テキスト：Gaskell, Elizabeth, Granford (KENKYUSHA) 1928

注) 小池滋 『女だけの町』 岩波文庫



# 女が書く女の伝記

佐野智子

エレイン・ショウォールターはその著書 *A Literature of Their Own* において、偉大なるイギリスの女性作家達の伝統とその復権を高らかに宣言したが、イギリス小説の女性の領土に関して、次のように表している。

women's territory is usually depicted as desert bounded by mountains on four sides: the Austen peaks, the Brontë cliffs, the Eliot range, and the Woolf hills.<sup>1</sup>

しかしショウォールターも述べているように、この四方の山々に取り囲まれた大地は決して砂漠などではなく、恵み豊かな楽園である。そしてこのブロンテ絶壁という登りやすくない地への道標を置き、その奥に隠された豊かな泉へと招いてくれたのは、同じ女性であり、また小説家であるギaskell夫人、その人である。

シャーロット・ブロンテの *Jane Eyre* とギaskell夫人の *Mary Burton* は同じ1848年に出版され、その二年後に初めて2人は出会うことになる。この時、ギaskell夫人40歳、シャーロット34歳であった。母としてまた家庭の主婦として多くの人々に囲まれ多忙な日々を送っていたギaskell夫人と、妹たちに先立たれ、病身の父親の世話をしながら荒野の牧師館で孤独に作品を書き続けていたシャーロット、2人の間には大きな環境の違いはあったが、同じ女性として、作家としての共感が暖かい友情を育てていくことになる。これがこの *The Life of Charlotte Brontë* に見事に結実し、伝記作家としてのギaskell夫人の名を高めるとともに、誤解されがちであったシャーロットの女性としてのありのままの姿を世に知らしめることとなった。

ギaskell夫人は1855年、シャーロットの死後、彼女の伝記を書く意志があることをほのめかし、秘密に閉ざされたシャーロットの人生の真実を世間に理解してもらおうと考えたのだ。<sup>2</sup> そのためこの作品の書く時に、ギ

ヤスケル夫人はその想像力でシャーロットの姿—内面を描き出すというより、シャーロット自身の手による書簡にそのページの多くをさき、後は客観的な事実を伝えるように努めているようである。このことはギヤスケル夫人のシャーロットへの感情の表出を抑制するように思われるが、逆にシャーロットに対する深い共感と尊敬の念を浮かび上がらせているのではないだろうか。ここで注目したいのは、このギヤスケル夫人の共感と尊敬の感情は作家としてのシャーロットよりも、女性としてのシャーロットにより多く捧げられているということである。

この伝記の読者の胸を一番打つのは、シャーロット・ブロンテという才能にあふれた女性作家の苦しみの多い人生と、それに雄々しく立ち向かって行った彼女の気高さであろう。母親と二人の姉に早くに死なれたシャーロットは妹たちや弟、そして父親の面倒をみなければならぬ責任を負わされた。父親や妹たちそして自分自身の健康状態、また一家の財政難や、ブランウエルの放蕩などシャーロットの小さな肩にはいかに多くの責任と苦しみがのしかかっていたことか。しかしそれはシャーロットの果たさなければならない義務であった。父の娘としての義務、そして妹たちの姉としての義務、一家の主婦としての義務にシャーロットの人生は捧げられたのだ。この *The life of Charlotte Brontë* に描かれているのはこのような女性の姿なのである。ギヤスケル夫人はシャーロットがいかにこのような義務に忠実であったかについて、彼女の手紙から、行動から、そして知人たちの話から繰り返し描写する。ギヤスケル夫人はシャーロットの人間としての真価はここにあると、これによりシャーロットは世の尊敬を与えられるべきであると考えているようである。<sup>3</sup>

このようにギヤスケル夫人はこの伝記の中でシャーロットの女性としての特質を、つまりギヤスケル夫人が女性の美質と考えているものを、いかに表すかということを第一に考えているようである。シャーロットは実際にそのような女性であったのかもしれない。が、シャーロットの *Jane Eyre* がこの時代の基準からすれば余りにも女性らしくない情熱が書かれていると批判されたことを考えるとこのシャーロットの姿は非常に対照的であると思われる。*Jane Eyre* を書いたカラ・ベルと、家族のために自己を抑制し、自分の義務を全うしたヨークシャーの牧師館の娘、という二人の人間がいるかのようである。カラ・ベルがその作品の力強さ、ペン・ネームにより実際に男性であると信じられたこともあったが、ギヤスケル夫人の描くシャーロットは

あくまで内気で人見知りの激しい小柄な女性である。もちろんカラ・ベルはシャーロット自身であるが、シャーロットの手紙の中に時に見られる激しさ、特に作家としての自分を女性と考えてほしくないと主張する時の力強さ、それにも関わらず批評が、女性であることを忘れないものである時の怒り<sup>4</sup>、これをギaskell夫人は「尊大さ」と表現しているが、このような内面の激しさこそシャーロットの中のカラ・ベルあるいは *Jane Eyre* の作者としてのシャーロットと言ってよいであろう。しかしこのような「尊大さ」の一方で、シャーロットは自分の作品に「女性らしさ」が欠けているのではないかと友人に尋ねている。このようなアンビヴァレンスは、女性作家に特有のものなのであろうか。女性であると同時に作家でもあるという立場のアンビヴァレンスなのであろうか。このアンビヴァレンスこそ、シャーロットがカラ・ベルという男性名のペン・ネームをつけさせたものであろう。しかしこれについてギaskell夫人は何の考察も加えていない。むしろシャーロットの女性を賛美する方向へ向かうのである。ここにシャーロット・ブロンテという女性作家とギaskell夫人の考える女性作家というもののずれがあるのではないだろうか。ギaskell夫人はこの伝記の中で、女性作家の使命というのは男性が作家である場合とは全く別のものであると考えている。男性が作家になるということは単に職業上の問題でしかないが、女性が作家になるということは女性として生きる中で、つまりそれは娘、妻、母としての務めを果たす中で、選び取るべきものであるということなのである。<sup>5</sup>

シャーロット自身、このように述べると、真のシャーロット・ブロンテという女性がどこかに存在しているようであるが、果たして自らに男性名をつけたシャーロット・ブロンテという作家が、ギaskell夫人が考えるような女性作家であったかどうかは分からない。しかし「どちらがシャーロットの真の姿であると言えるのか」、ということを考えるのも無意味なことではないだろうか。ここで確実に言えるのは、ギaskell夫人はこの伝記の中で、シャーロットが自らの女性としての義務と神から授けられたすばらしい才能を行使するという二つの責任を見事に果たした類稀なき女性であるということを読者に理解させたということであろう。あの二重基準のヴィクトリア朝時代に生き、ものを書いた女性を、同じ女性として理解し合える最高の賛美をもって描こうとしたのである。女性としての義務に忠実に、同じように作家としての義務に忠実に生きたシャーロット・ブロンテという女性の人生の苦闘の記録を描いたのがこの伝記なのである。そしてこの伝記をもってシャ

ーロット・ブロンテという一人のヒロインが誕生するのである。

女性が他の女性について書く時、男性が同じように同性について書く、または女性について書く時と何らかの違いはあるのだろうか。そして作家が他の作家について書く時、書かれた作家についてのみならず、書いた作家自身についても何かを明らかにするものなのであろうか。ギャスケル夫人はこの伝記の中で作者と言う自分の痕跡を注意深く消し去っている。夫人自身も作中で述べているように、この作品をシャーロットの真実、ありのままの記録したものであるように努めている。しかしギャスケル夫人がこの伝記のために選んで載せたシャーロットや他の人々の書簡や、真実の書き方などを通して浮かび上がってくるものは *Jane Eyre* の作者であるシャーロット・ブロンテを越えて、女性として作家として苦しみに耐えて生きた一人のヒロインなのである。ギャスケル夫人の目を通して描かれる一人の普遍的な女性作家という存在なのである。苦しみや悩みは個人により様々ではあるが、女性であり、作家であるというアンビヴァレンスな立場に置かれた、普遍的な女性作家という姿を描いたのである。

かつてものを書くという行為は男性のものであった。エレン・モアズも指摘するように女性であり同時に作家であるということはモンスターと同じであった。シャーロットも桂冠詩人であるロバート・サウジーに女性は文学に関わるべきではないと忠告されている。しかしシャーロットは書き続ける。そしてギャスケル夫人もそのようなシャーロットを書き続ける。この *The Life of Charlotte Brontë* は、女性であることと、作家であることについて書かれた、二人の女性作家の見事な調和の、つまりシスターフッドの記録であり、またいやおうもなくこの二人の作家の個性の違いを浮かび上がらせているのであると言ってよいであろう。

#### 註

- 1) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own* (Princeton University Press 1977) vii
- 2) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (Penguin Books 1975) p.00
- 3) *Ibid.*, p.490
- 4) *Ibid.*, p.386
- 5) *Ibid.*, p.334

# 「乳母物語」の娯楽性と倫理性

足立万寿子

(1)

イギリス・ヴィクトリア朝時代(1837-1901)、人々はクリスマスの日に教会の礼拝を済ませると家族、親戚、親しい友人たちが集まって、ご馳走、ゲーム、素人芝居、歌、踊り<sup>1)</sup>、また、幽霊話<sup>2)</sup>にも興じたという。その楽しみに話題を提供するように、週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*) 1852年度クリスマス特別号<sup>3)</sup>には、幽霊物語が2作掲載されているが、そのうちの1作がギaskell夫人(Mrs Gaskell)の「乳母物語」(“The Old Nurse’s Story”)である。

ギaskell夫人自身幽霊物語が好きであったようである。シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë)がギaskell家を2度目に訪問した時、夫人が例によって夜寝る前に幽霊物語をしようとしたら、シャーロットは夢を見て眠れなくなりそうだから止めてほしいと言ったという<sup>4)</sup>。また、夫人は、親友への手紙の中で「幽霊を見たのよ。本当よ」(I SAW a ghost! Yes I did)<sup>5)</sup>と知らせているところを見ると、夫人は幽霊の存在を信じていたのかもしれない。

(2)

『ハウスホールド・ワーズ』1852年度クリスマス特別号に掲載された10の物語の中で現在多くのものは忘れ去られてしまっているが、「乳母物語」はその後100年以上を経てなお人々に読み続けられている。このように人気を保っている要因のひとつは娯楽小説、幽霊物語としての面白さ、もうひとつはこの短篇の根底に流れている、真摯で普遍的な思想ではないか、と私は考える。このように考える根拠をこの小論で明らかにしていきたい。

(3)

幽霊物語が娯楽読物として成功するには超自然現象に信憑性があること、加えて、読者に与える恐怖の度合いが大切となろう。これらについて小説技法の諸点からこの物語を分析していきたい。

まず、視点の問題を考察したい。この短篇の語り手は乳母のヘスター(Hester)である。ヘスターが仕えている女主人ロザモンド(Rosamond)が幼いころ、幽霊の犠牲になりそうになった恐ろしい事件が起きる。時経て、ヘスターはこの事件をロザモンドの子供たちに話して聞かせることになるが、これがこの短篇の現時点という設定になっている。

ヘスターは、ファーニヴァル(Furnivall)領主家の親戚のロザモンドが誕生した時からロザモンドに仕え、そして、ロザモンドが結婚しても主人の元を離れず、ロザモンドの子供たちの世話もしている。このように母子二代にわたって仕えてきたこと、また、ロザモンドを必死で幽霊から守ろうとしたことから、ヘスターは責任感があり、信頼がおけ、また愛情深い女性であることが窺える。このように誠実な人が空想による潤色を加えたり、嘘を交えたりはしないであろうと推測され、ヘスターが語るならば、現実には信じがたいような話も真実味を帯びてくる。つまり、この超自然現象を扱った幽霊物語の信憑性が増すことになる。

さらに、ヘスターはファーニヴァル家の人々から見ると局外者であるので、この一家の呪いについては客観性を持って描写できる立場にあると考えられ、ギヤスケル夫人が選んだこの視点は、超自然現象に真実味を与えるのにさらに効果的であるといえよう。

次に、構造について考察したい。「乳母物語」は、大きく分けると「現在」と「過去」の2重枠構造になっている。「現在」は乳母が子供たちに昔の出来事を話してやっている現時点の世界で、これが短篇の「外枠」になっている。「過去」は現時点から一昔前に遡った、ロザモンド幼少時の幽霊事件が起きた時点であって、これが「内枠」になっている。さらに、この「内枠」の中には、老ファーニヴァル卿、その長女のモード(Maude)・ファーニヴァル、次女のグレイス(Grace)・ファーニヴァルの3人の間で確執が生じて、その結果、モードとモードの不義の子が凍死する事件が含まれている。これを「最内枠」と名づけたい。

この「現在」の枠と「過去」の枠をつないでいるのが乳母ヘスターで、

全体を通しての語り手となっているが、「最内枠」はファーニヴァル領主家に仕えるドロシーが語り、ヘスターが聞くという形式を取っている。語り手が直接経験できないことは他の作中人物の口を通して語らせるこの手法は、「異父兄弟」(“The Half-Brothers”)など夫人の他の短篇にも見られるように<sup>9)</sup>、視点の統一を乱さずに、しかも、事件の経過をごく自然に手際よく読者に伝える巧みな小説技法と言える。

次に、背景について考察すると、「外枠」である「現在」はイングランドの南部に設定されており、一方、「最内枠」を含め、「内枠」である「過去」は北部に設定されている。乳母の故郷と乳母が初めて仕えた牧師館はイングランド北部のウェストモアランド(Westmorland)州にあり、牧師館の牧師夫婦が亡くなって、乳母と遺児ロザモンドが引っ越していくファーニヴァル領主館はさらに北部の、スコットランドに隣接するノーサンバーランド(Northumberland)州にある。イングランド北部の気候は厳しい。夏でも雨が降れば寒く、ましてや、冬は寒風吹きすさび、雪も深い。これに対して、南部はおだやかである。温和な南部という「現在」の中にいる子供たちが、厳しい北部という「過去」の中に出没する幽霊の物語を聞く設定になっているので、その恐怖感は一層つものことになると思われる。

しかも、北部は魔女やその他超自然的存在の伝説が豊富なところである<sup>10)</sup>。さらに、ファーニヴァル領主館の周りの鬱蒼たる樹木。何代も前からの骨董品や肖像画が置かれ、迷路のようになった薄暗い館の内部。これらの設定は幽霊物語にはまさにうってつけであり、恐怖感を増すのに効果を発揮している。

次に、事件の展開方法について見てみたい。物語に出てくるすべてのことが、この短篇の大団円——老ファーニヴァル卿、モード、モードの子、グレイスのそれぞれの幽霊がすべて、ヘスターと幼いロザモンドの前に姿を現わす場面——に向けて集中するように無駄なく緻密に配置されている。例えば、初めてヘスターとロザモンドがファーニヴァル領主館に着いたときの、玄関ホールの詳細な描写がすべて、その後展開する事件と密接に結びついている。玄関ホールの西の壁に造りつけになっている大オルガン。これは、後に、幽霊となった老ファーニヴァル卿が弾いていると言われているオルガンの響きの伏線となっているし、また、大団円の開始の合図にもなっている。東翼への開かずのドアは、モードとその子の存在、並びに、この母子の不幸

な運命を暗示し、さらに、最後の山場への伏線となってる。玄関ホールの大シャンデリアと大暖炉も、大団円で、「青銅製の大シャンデリアにはすっかり火が灯っているように見えるのに、ホールは薄暗いのです。大暖炉の火は炎をあげて燃えているのに、少しも熱くないのです」(the great bronze chandelier seemed all alight, though the hall was dim, and that a fire was blazing in the vast hearth-place, though it gave no heat)<sup>8)</sup>と描写されているように、幽霊が出現する恐ろしい雰囲気や巧みに作り出すのに使われている。また、丘の中腹に生えている2本のヒイラギの老木は、幼いロザモンドが雪の日行方不明になり、ようやく発見される事件、グレイスの胸をかきむしられるような悔恨、不義が発覚し家を追い出されたモードとその子が凍死した事件、と結びついていき、さらに大団円で登場するモードの幽霊の確認につながっていく。その他、この短篇の初めの部分で、若いころのグレイスについて、その肖像画の表情と服装が、

Such a beauty she [Grace] must have been! but with such a set, proud look, and such scorn looking out of her handsome eyes, with her eyebrows just a little raised, ...; and her lip curled .... ...a hat of some soft, white stuff ... pulled a little over her brows, ...; and her gown of blue satin was open in front to a quilted, white stomacher.<sup>9)</sup>

と、描写されている。その後、大詰の場面で、出現する幽霊のひとりが、

That figure was very beautiful to look upon, with a soft, white hat drawn down over the proud brows, and a red and curling lip. It was dressed in an open robe of blue satin.<sup>10)</sup>

と描写されている。この両者の描写で、この幽霊がグレイスの幽霊であることが確認されることになる。つまり、グレイスの肖像画はこのための巧妙な伏線となっていたことが分かる。

また、ファーニヴァル家にかかった恐ろしい呪いの謎は、語り手ヘスターにより、少しずつ解明されていくが、視点が厳密にヘスターだけに置かれているため、大団円までサスペンスが巧みに維持されていく。

このように恐怖を最後の一点に集中させていく事件の展開方法は読者の



興味を惹きつけて離さない誠に優れた手法であると言えよう。

最後に、物語にリアリティーを与えるものとして、ギヤスケル夫人独特の、何げなく見えるが、一瞬にして事態を理解させ得る巧みな描写が挙げられる。例えば、グレイスの顔の皺について、「針の先で引いたような」(as if they [wrinkles] had been drawn all over it [her face] with a needle's point)<sup>11)</sup>という短い表現で、読者は瞬時に、瘦せて陰鬱そうなグレイスの顔を想像できよう。また、ヘスターがオルガンの蓋をあけて、中をこっそり覗き、壊れていることを知り、恐ろしさのあまり身震いする場面で、「前にクロスウェイト教会のオルガンの蓋を開けて中を見たことがありましたので」(as I had done to the organ in Crosthwaite Church once before)<sup>12)</sup>と一言ヘスターに付け加えさせることで、田舎の下層階級のヘスターがオルガンの構造をたとえ僅かにせよ知っていても不思議ではないことを暗示し、リアリティーを出すのに効果を奏している。その他、ヘスターが、ロザモンドを幽霊の魔の手から守ろうとして必死で抱き締めていた様子は、「死んだとしてもまだ手だけはロザモンドさまを掴んで放さないでいたかもしれません」(If I had died, my hands would have grasped her [Rosamond] still)<sup>13)</sup>、そして、「ひょっとすると手の跡がロザモンドさまの体に残ったかもしれません」(till I feared I should do her a hurt)<sup>14)</sup>という表現に簡潔に表されている。これらの描写、表現がこの幽霊物語に現実感を与えていることは確かである。

このように見てくると「乳母物語」はスリルとサスペンスに富み、しかも、現実性も持った誠に面白い幽霊物語であって、娯楽読物として優れていることに納得がいくであろう。

( 4 )

続いて、この短篇の持つ思想を考察したい。イギリスでは、フィリップ・シドニ(Philip Sidney)も述べているように、古来、文学は「楽しませつつ、教えるもの」と考えられてきた<sup>15)</sup>。ギヤスケル夫人にもこの傾向は強く、作品に娯楽要素に加えて、自分の倫理観を盛り込もうとしていることが感じられる。そこで、夫人が「乳母物語」に織り込もうとしている倫理思想を考察していきたい。

この短篇の「最内枠」に登場するファーニヴァル領主家の人々の性格や行動、そして、この一家に起きた悲慘な事件を要約すると、こうなる。すなわち、老ファーニヴァル卿、その長女モード、次女グレイスはすべて高慢な人々である。そして、モードとグレイスは恋人の音楽師をめぐる嫉妬し合っている。モードは音楽師と密通し、密かに女の子を産む。グレイスは嫉妬のあまり姉への復讐を誓い、機会を見て父親に私生児のことを密告する。老ファーニヴァル卿は憤りのあまり不義をはたらいた長女とその子を雪の降る戸外へ放逐し、凍死させる。その後老ファーニヴァル卿は自分がとった無慈悲な処罰を悔いるあまり、あれほど好きであったオルガンをその日以来弾かなくなり、良心の呵責に苛まれて、間もなく亡くなってしまいが、幽霊となってオルガンを弾き続ける。モードは妹と父親の酷い仕打ちを恨むあまり、死んだ後、幼いわが子とともに幽霊となって犠牲者を求めて領主館周辺に出没する。グレイスは生きながらえるが、過去に犯した罪深い醜い行為——高慢と嫉妬に狂って姉に復讐し、罪もない子を死なせたこと——を生涯悔い続け、そして、立ち直れないまま死んでいく。

この要約から、ギヤスケル夫人が読者に伝えようとした思想内容が読み取れよう。すなわち、七罪源<sup>16)</sup>の中の高慢、嫉妬、憤怒の問題、その他、未婚の母と私生児の問題、罪と良心の呵責の問題などである。

これらの問題は夫人の他の作品<sup>17)</sup>にもしばしば見られるが、「乳母物語」で夫人が特に採り上げようとした問題はグレイスに具現されているように思われる。その根拠は、グレイスが「最内枠」の中で語られる老卿一家のうち「内枠」の時代まで生き残った唯一の人であり、しかも夫人はグレイスについての描写は、ドロシーなど別の人物からの伝聞によらないで、語り手であるヘスターの直接の観察からなされるように設定して、グレイスという登場人物の重要性を際立たせようとしていることである。その他の根拠として、幽霊となる4人の登場人物のうち、老ファーニヴァル卿、モード、そして、モードの子は、それぞれ一旦地上の生命を亡くした後、幽霊となってさまよっているが、グレイスは生きている間に自分自身の幽霊が出現することが挙げられる。普通、幽霊は死後に出るものであるとすると、ギヤスケル夫人はグレイスに特異性を付与していることになり、グレイスに特別の意味が込められているように思える。これらのことから、ギヤスケル夫人がこの短篇で強調しようとした思想をグレイスという人物によって具現化しようとしてい

る、と考えることができよう。

若いころには嫉妬深く、無慈悲であったグレイスの老年になってからの言動を見ていくと、グレイスは、ロザモンドが行方不明になった時、寒さで震えながらも自分も一生懸命ロザモンドを捜そうとするし、ロザモンドがヒイラギの老木の下で発見されたとヘスターから聞いた時、グレイスは「ロザモンドを幽霊から守るように」(...keep her [Rosamond] from that child [the Spectre-Child])<sup>18)</sup> と言い、人を愛する人間になっていることが示される。また、グレイスは、かつては姉を憎むあまり姉の子が虐待を受けるのを歓迎していたが、大団円では老ファーニヴァル卿の幽霊がモードの子の幽霊を松葉杖で打とうとしているのを見て、父親である老ファーニヴァル卿の幽霊に「罪のない子を打たないで」(...spare the little, innocent child!)<sup>19)</sup> と懇願し、慈悲心を持つようになっていくことが示される。

しかし、このように悔恨し、善を尽くそうとしても、すでに犯した罪を消し去ることはできないのである。グレイスは「あんなに何年も昔のことなのに、神はお赦しくださらない」(Wilt Thou never forgive! It is many a long year ago—)<sup>20)</sup> と言って、かつての罪の重みに喘ぎ苦しむ。そして、それに止めを刺すかのように大団円で、若かったころのグレイスの姿をした幽霊が、生きているグレイスの眼前に現れ、その幽霊は松葉杖で打たれる子供の幽霊を平然と見ているのである。それを見て、グレイスは、醜い過去の自分の姿、すなわち、傲慢で、嫉妬深く、無慈悲で、復讐心に燃えていた自分の罪深さを再認識させられて、ショックのあまり全身麻痺し、倒れ、やがて死んでいく。

グレイスは、いかに良心の呵責に苛まれ、罪を悔い、償い、回心したとしても、一旦犯した罪は消えてなくなることはないということを、かつての自分自身の醜い姿を映した幽霊を見て、悟ることになるのである。グレイスのこの悟りは、この短篇の最後でグレイス自身が2回繰り返してつぶやく言葉「若いころのあやまち、老いても消せぬ」(What is done in youth can never be undone in age!)<sup>21)</sup> に集約されている。ここで、ギヤスケル夫人は「罪を犯したという事実は消え去ることはない」という厳しい思想を、マクベス夫人(Lady Macbeth)のせりふ「What's done cannot be undone」<sup>22)</sup> が連想されるこの衝撃的な一文に凝縮させて、説こうとしているように思える。

「罪」の問題は、「良心」を持つ人間にとって重大な問題であることは言

うまでもない。ドストエフスキーを初め、世界の多くの作家がこのテーマを繰り返し扱ってきている。ギヤスケル夫人も何度もこの人類普遍の問題を採り上げ、罪についての厳格な倫理観を作品の中で説いている。例えば、「リジー・リー」(“Lizzie Leigh”)の中のリジーは犯した罪を心から悔い、生涯を不幸な人々への奉仕に捧げるが、死ぬまで心の平安を得ることはないのである<sup>23)</sup>。『メアリー・バートン』(*Mary Barton*)の中のバートンも犯した罪の呵責に苛まれるあまり、死んでしまうのである<sup>24)</sup>。

ギヤスケル夫人は「説教壇に立っている」(She too obviously takes the pulpit)<sup>25)</sup>と言われるほど、自己が正しいと信じる倫理観を小説の中で説こうとする教訓癖がある。グレイスの不幸な生涯は、夫人から読者への真摯な警告であったと解釈されよう。

あまりこれに重点が置かれると読者の反発を招くかもしれないが、「乳母物語」では、死者だけでなく、生者の幽霊も現れる最後の場面の極度の恐怖と、グレイスの受けたショックを通して示されている「罪」の恐ろしさが巧みに相乗効果を挙げて、この警告は、即座に教訓とは気づかないほどに幽霊物語の中に消化されている。

ギヤスケル夫人は罪への厳しい倫理観を持っている一方、ユニテリアン(Unitarian)派のひとりとして、神への揺るぎない信仰から、人間の絶対的存在価値を確信し、人々の愛の力に信頼を寄せ、愛を実践しようとしていた<sup>26)</sup>。

そのために、夫人はこの短篇の暗い調子の中にも明るさを感じさせるように配慮を行っている。例えば「一家のお日さまのような」(like a sunbeam in any family)<sup>27)</sup>愛らしいロザモンドが領主館の中を「小鳥のように軽やかに入って来ると、思い詰めた悲しそうな顔をしたファーニヴァルさまも、それに、冷ややかなスターク夫人も和やかな表情になりました」(The hard, sad Miss Furnivall, and the cold Mrs Stark, looked pleased when she [Rosamond] came fluttering in like a bird)<sup>28)</sup>という描写は暗い館の中に明るい日光が差し込むような効果を与えている。また、乳母ヘスターを初めとして、罪の意識に苛まれるグレイス、また、「およそ人を愛したことがないように見える」(as if she had never loved or cared for any one)<sup>29)</sup>冷ややかなスターク夫人まで館のすべての人々が行方不明のロザモンドを心配して捜し回ったり、また、ロザモンドが幽霊に誘い出されないように、カンヌキやよろい戸の窓をしっかりと閉めてロザモンドを懸命に守ろうとしてい

る描写には、館の人々のロザモンドへの熱い愛情が感じられる。これらにより、ギヤスケル夫人はこの短篇の中で罪の厳しさを説きながらも、人生に明るさを保ち得る愛の力が存在していることを伝え、人を愛する大切さを説こうとしていると言えよう。

読者は幼子ロザモンドの愛らしさ、そして、幼子への大人たちの愛に触れて、心温まる思いがし、人生に希望を持ち、生きる勇気を得ることになる。これがこの短篇の魅力を増し、人気を保つ源のひとつとなっているように思える。

( 5 )

ギヤスケル夫人がこの幽霊物語を単なる娯楽恐怖小説にするつもりがなかったことはディケンズとのエピソードにも表れているように思える。

ディケンズは、大団円で幽霊は子供ロザモンドだけに見えて、大人たちには見えないほうが恐怖感が増す、しかも、シェイクスピアの時代から幽霊は当事者だけに見えるものと決まっていると主張して、この部分を書き直すようにギヤスケル夫人に提案した<sup>30)</sup>。しかし、ギヤスケル夫人は頑強にこれを受け入れなかった<sup>31)</sup>。

その理由は、夫人がこの短篇で恐怖よりは罪の持つ意味と人間の愛のほうを重視したからであろう。大人であるグレイスが、経験も浅く人生の苦しみも知らない幼いロザモンドから幽霊の説明を受けて、この幽霊が、自分の若いころの高慢、嫉妬、憎悪、復讐の罪に汚れた自分の醜い本質であると知ったのでは、短篇全体が醸し出す異常な恐怖感は強まるかもしれないが、この短篇で伝えようとした罪についての思想は弱まってしまうように思える。グレイス自身が犯した罪の重大さをはっきり認識するには、自分の目で自分の幽霊を見る必要があるからである。そして、ロザモンドだけでなく乳母ヘスターも幽霊を目のあたり見るからこそ、幽霊の存在を確信し、その恐ろしさを理解し、ロザモンドを守り抜かなければ、という愛情が一層強まるからである。

( 6 )

「乳母物語」をヘンリー・ジェームズ(Henry James)の『ねじの回転』

(*The Turn of the Screw*)<sup>32)</sup>と比較すればギヤスケル夫人のねらいが一層明らかになろう。

『ねじの回転』も子供に幽霊がまといつく物語である。ジェイムズは「乳母物語」から影響を受けた可能性もある<sup>33)</sup>、と言われている。『ねじの回転』の「外枠」は、ダグラス(Douglas)という男性が、ある女家庭教師から預かった手記を友人、知人に読んできかせる、という形になっている。しかし、実質的には、語り手である女家庭教師が預かった兄妹を邪悪な幽霊から守ろうとして戦う経過を語っていく。これが小説の「内枠」になっている。

『ねじの回転』の中では、男の幽霊と女の幽霊がそれぞれ男の子と女の子を悪の道に引き込もうとしているが、幽霊の姿は子供たちと女家庭教師には見えるのに他のだれにも見えない。子供たちが幽霊の餌食になろうとしているのにもかかわらず、他のだれも気づかない<sup>34)</sup>。恐怖は高まり、女家庭教師が孤軍奮闘する悲愴さも強まっていく。

幽霊が子供を誘惑しようとする点、また、語り手が子供を幽霊から守ろうとする点では、この2つの物語は似ている。しかし、『ねじの回転』では幽霊は語り手と子供にしか見えないが、「乳母物語」ではすべての人に見える。この違いは作者のねらいの違いを反映していると考えられよう。ジェイムズは小説という形式で徹底した恐怖を描こうとしているように思える。従って、当事者だけに幽霊が見えて、他人には全く見えず理解を得られないほうが、恐怖感、悲愴さは強まり、効果的であると言えよう。一方、ギヤスケル夫人は幽霊を登場させて罪の問題を追究しながらも、人々への愛にも信頼を寄せて、小説を書いている。従って、恐怖度は犠牲にしても、すべての人に幽霊が見えるようにして、犯した罪の重大さを描き、また、すべての人が大切な子供を幽霊から守ろうとする愛情を描こうとしたと考えられる。

これは、小説の「外枠」と「内枠」の違いにも表れている。『ねじの回転』では、「外枠」と「内枠」にいる人々はそれぞれ全くの他人で、愛情を感じ合う関係にはない。「外枠」にいる人々はこの幽霊物語を聞いて余暇を楽しもうとしているだけである。ところが、「乳母物語」では「外枠」と「内枠」をつないでいるのが愛情深い乳母ヘスターで、その上、「内枠」の中の人々の間だけでなく、「外枠」の中に登場する年とった乳母とその乳母のお話を聞いている子供たちの間にも、愛情が通い、家庭的温かさが醸し出されているのが、記述されていないが、感じられるのである。

『ハウスホールド・ワーズ』の1852年度クリスマス特別号に掲載された、もうひとつの幽霊物語はエドモンド・ソール・ディクソン(Edmund Saul Dixon)<sup>35)</sup>の「雑役婦物語」(“The Charwoman's Story”)<sup>36)</sup>である。この2短篇を比べてみよう。

「雑役婦物語」は、現在は雑役婦として働いている女性が、昔、料理人としてある一家に仕えていた時、その一家の主人が幽霊になったということ、同僚の御者から告げられるという話である。

この物語を要約すると、この一家の主人は事業家で、事務所と自宅を持っており、この間を自家用馬車で通っていた。主人は脳溢血の後遺症の影響で歩き方が変わり、歩く時靴の片一方が奇妙にキュウーキュウーという音をたてるようになり、主人の姿が見えなくても、靴が軋む独特の音で主人がどこを歩いているかみなに分かるようになっていた。ある日、御者は主人を事務所まで送り、忙しい主人はその日は事務所に泊まり、翌日の午後御者が主人を迎えに行くことになった。その日の夜は激しい雨風になったが、深夜、御者は主人の靴の軋みを聞いて、主人が予定を変更してお帰りののだと思い、出迎えようとしたが、独特の足音だけ聞こえて、姿が見えない。足音だけがドアを叩いて部屋へ入っていく。しかし、ドアにはすべてカンヌキがかかっているため、御者はこれは主人の幽霊だと直感し、主人は亡くなったのだと推察する。その翌朝、主人が事務所死んだとの知らせが届き、御者は自分の勘が正しかったことを知る。

以上がこの幽霊物語の要約である。幽霊が姿を現さないで、音だけを立てる設定はユニークで面白し、「creak! creak!」という気味悪い擬声音が繰り返されるのも、恐怖心をそそるが、「乳母物語」の恐ろしさに比べるとものの比ではない。

また、なぜ主人が幽霊になったのか、その経緯が全く示されていない。さらに、この料理女と御者の間に恋愛感情らしいものがあつたことや、また、主人一家の令嬢たちが親切なる人らしいことは推察できても、生きた人間としての存在感があるようには描かれていない。肝心の主人についても、どのような人柄なのか全く描かれていない。自宅の構造についても、金持らしいとは分かるが、具体的なイメージが湧くような描写はない。ましてや、作者の真摯な思想は織り込まれてはいない。

幽霊物語としての恐怖度、また、小説手法、思想のどの点をとってみても「乳母物語」の方が数段優れた作品であることは確かである。

( 8 )

このように考察してみると、「乳母物語」は恐怖を最後の一点に集中していく優れた幽霊物語であるとともに、幽霊の出現原因を人間の普遍的問題「罪」と結びつけ、さらに、人を愛する大切さを語った、娯楽面と倫理面を見事に融合させた作品であると言えよう。

[註]

- 1) Antony and Peter Miall, *The Victorian Christmas Book* (London: Dent, 1978), pp.97-159.
- 2) Enid L. Duthie, *The Themes of Elizabeth Gaskell* (London: Macmillan, 1980), pp.139-40 によると、クリスマスに幽霊物語を楽しむ習慣はディケンズが定着させたという。
- 3) Charles Dickens (ed.), *Household Words*, 19 vols, with 1 extra vol. (rpt. Tokyo : Honnotomosha, 1989), VI, 1-36.
- 4) Elizabeth Haldane, *Mrs. Gaskell and Her Friends* (London: Hodder and Stoughton, 1930), pp.136-37.
- 5) J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (ed.), *The Letters of Mrs Gaskell* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1967), p.81.
- 6) 足立万寿子「ギヤスケル夫人の短篇小説『異父兄弟』にみられる愛」、『東京都私立短期大学英語英文学会研究紀要』, No.20 (1991), 20.
- 7) *The Works of Mrs. Gaskell*, with introductions by A. W. Ward, 8 vols, (1906; rpt. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1974)/The Knutsford Edition/, V, xx.



- 8) Elizabeth Gaskell, *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford: Oxford University Press, The World's Classics, 1981), "The Old Nurse's Story", p.54.
- 9) *Ibid.*, pp.40-41.
- 10) *Ibid.*, pp.55-56.
- 11) *Ibid.*, p.38.
- 12) *Ibid.*, p.42.
- 13) *Ibid.*, p.54.
- 14) *Ibid.*, p.55.
- 15) フィリップ・シドニ著、中田修訳『シドニ詩集』（東京教学社、1976年）、p.284.
- 16) 七罪源とは高慢、貪欲、嫉妬、邪淫、貪食、憤怒、怠惰である。
- 17) 『メアリー・バートン』、『ルース』(*Ruth*)、「リジー・リー」、「ブリジェットの呪い」("The Poor Clare")、「クリスマス、嵐のち晴」("Christmas Storms and Sunshine")など。
- 18) "The Old Nurse's Story," *op. cit.*, p.47.
- 19) *Ibid.*, p.55.
- 20) *Ibid.*, p.47.
- 21) *Ibid.*, p.56.
- 22) Alfred Harbage (ed.), *William Shakespeare: The Complete Works* (Baltimore: Penguin Books, 1969), p. 1131, *Macbeth*, V, i, 62-63.
- 23) 足立万寿子「*Lizzie Leigh* にみられる信仰」、『ギヤスケル論集』, 第3号 (1993), 60-61.
- 24) 足立万寿子「小説 *Mary Barton* にみられる Mrs Gaskell の労働者観」, 『明の星女子短期大学紀要』, 第9号 (1991), 93.
- 25) A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (London: John Lehmann, 1952), p.89.
- 26) 足立万寿子「小説 *Mary Barton* における手法と作者の人間観」, 『明の星女子短期大学紀要』, 第10号 (1992), 33-34.
- 27) "The Old Nurse's Story," *op. cit.*, p.36.
- 28) *Ibid.*, p.40.
- 29) *Ibid.*, p.39.
- 30) Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis (ed.), *The*

*Letters of Charles Dickens*, VI (Oxford: Oxford University Press, 1988), 799-801.

- 31) John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention* (Fontwell: Linden Press, 1970), p.143.
- 32) Henry James, *The Turn of the Screw / The Lesson of the Master* (New York: The Modern Library, 1930). ヘンリー・ジェイムズ著, 蒔沢忠枝訳『ねじの回転』(東京, 新潮文庫, 1962年).
- 33) Edgar Wright, *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (London: Oxford University Press, 1965), p.165.
- 34) 『ねじの回転』 *op. cit.*, p.247 で言及されているように, 幽霊は実際には存在しない, ただ家庭教師の幻覚に過ぎないという解釈も可能であるが, 私はその反対の解釈を採りたい.
- 35) *Household Words*, *op. cit.*, extra vol., 103.
- 36) *Ibid.*, VI, 25-27.

*Wives and Daughters*  
-Sublimation of Mrs Gaskell's  
Social Interest?-

Hidemitsu Tohgo

It is neither original to ask the questions, who is the hero or heroine of *Wives and Daughters*, and what the novel is about, nor is it very academic to ask yourself why you find the book worth reading many times over. And yet I believe these questions will provide an appropriate starting point to my talk today.

(1) Who is the hero or heroine of this novel?

In her letter to Smith, her publisher, Mrs Gaskell made clear the plan of her novel.

...I have made up a story in my mind,—of country-town life 40 years ago,—a widowed doctor has one daughter Molly, —when she is about 16 he marries again—a widow with one girl Cynthia,—and these two girls—contrasted characters, —not sisters but living as sisters in the same house are unconscious rivals for the love of a young man, Roger Newton, the second son of a neighbouring squire or rather yeoman. He is taken by Cynthia, who does not care for him—while Molly does. His elder brother has formed a clandestine marriage at Cambridge—he was supposed to be clever before he went there—but was morally weak—& disappointed his father so much that the old gentleman refuses to send [his] Roger, & almost denies him education—the eldest son lives at home, out of health, in debt, & not daring to acknowledge his marriage to his angry father; but Roger is his confidant, & gives him all the money he can for the

support of his inferior(if not disrespectable) wife and child. No one but Roger knows of his marriage—Roger is rough, & unpolished—but works out for himself a certain name in Natural Science,—is tempted by a large offer to go round the world (like Charles Darwin) as a naturalist,—but stipulates to be paid half before he goes away for 3 years in order to help his brother. He goes off with a sort of fast & loose engagement to Cynthia,—while he is away his brother breaks a blood vessel, & dies—Cynthia's mother immediately makes fast the engagement & speaks about it to everyone, but Cynthia has taken a fancy for some one else & makes Molly her confidant. You can see the kind of story and—I must say—you may find a title for yourself for *I* can not.... (Letter 550 *The Letters of Mrs Gaskell* ed. by J.A.V.Chapple and A. Pollard, 1966)

In *Wives and Daughters* Mrs Gaskell's original pain is realized to a large extent. But it is a mark of her greatness as a writer that she amply developed her original design and created such a rich and complex novel.

In this novel who is the hero or heroine? Mr Gibson, Molly or both Molly and Cynthia? It is true that the story starts with Molly, a girl of 12 years old, on the morning of visiting the Towers, and ends when she, now a girl at the age of 17, is highly likely to marry Roger Hamley. But this is also a story of Mr Gibson, who believes his second marriage is planned for the sake of his daughter. In fact he is attracted by a beautiful widow, Clare, so even when he ought to be aware of what a serious mistake he has made in his choice of a second wife, he fails to realize his mistake, until the situation gets so serious he has to reprimand his wife in the name of professional secrecy. There is an intriguing gap between his high moral standards and his negligent attitude to the changed family atmosphere caused by his wife. In this sense, Mr Gibson stands as a superb study of an intelligent man's self-deception. And yet Mr Gibson remains merely one of several major characters, because every important incident

converges on Molly and it is mainly through Molly that the story evolves. What can be said about Mr Gibson is also true of Cynthia. Clearly Molly should be considered as the heroine of the novel, in that from start to finish the main emphasis is placed on her development as a woman, coping with many difficult situations and surviving psychological hardship.

But the interesting point is that in this novel there is something which makes you feel you are not doing it justice if you do not pay equal attention to the other characters. You may be tempted to think that in this novel there is no particular hero or heroine, but that the community, Hollingford, and the human relationships in it are what Mrs Gaskell wrote about, despite her original intention. Could one assert that *Wives and Daughters* resembles *Middlemarch*, rather than *David Copperfield* or *Shirley*? In this connection, Angus Easson's view is worth citing.

In its relationship to history, *Wives and Daughters* is more akin to the social and passional analysis of George Eliot's *Middlemarch* or even to the anti-romanticism of Thackeray's *Vanity Fair*, than it is to Scott's *Waverley* or Dickens's *A Tale of Two Cities*. (Introduction to the World's Classics edition, 1987)

Therefore, to ask the question, who is the hero or heroine of the novel is not so meaningless as it might seem. Nor is the answer so very simple.

Mrs Gaskell had already completed *Mary Barton*, *Ruth*, *North and South*, and *Sylvia's Lovers*. In these works one of her major concerns was the kind of difficulties a young girl was faced with when she was growing up in Victorian society, especially without a mother's protection.

In *Wives and Daughters* Mrs Gaskell follows Molly through her vulnerable years, seeing her father's second marriage and, as a result, experiencing some distress, while maintaining a delicate

relationship with her stepsister. In order to depict Molly's situation in full, Mrs Gaskell had to establish the rich texture of a highly structured provincial society. However, this endeavour does not prevent Molly from being the central character of the story.

(2) What is this novel about?

As the sub-title "An Every-Day Story" shows, nothing extraordinary happens in this novel. The quality of everyday-ness is clear when the novel is compared with *Mary Barton*, *Ruth*, and so on. In the former the condition of England question forms the background as Mary grows up. And at the same time the hardships of working people in Manchester are described with the author's warm sympathy. In *Ruth* the Victorian values are questioned through Ruth's unhappy yet saint-like life. And the main themes of each novel are apparent. In *Wives and Daughters* is the theme as clearly present?

As Angus Easson points out, "Molly, over the action's three years, moves from being the 17-year old hero worshipper of Osborne to the assured, intelligent, passional woman who will shortly and fittingly marry Roger." (op.cit.)

In a narrow sense, Molly's progress is the subject of the story. But the novel has a wide background. The period of the novel is set shortly before the Reform Bill of 1832, a time when in England the industrial revolution was in headlong progress and political power was on the eve of transferring from the landed class to the industrialists. And the ideas, say, of women's education and of marriage were to undergo a gradual change, gaining momentum until young women were admitted into Cambridge. Therefore, it is not far-fetched to say that a major concern of *Wives and Daughters* is social change, or society on the eve of change.

It is interesting to find Mr Gibson, an intelligent man and a devoted father, saying to Miss Eyre: "Don't teach Molly too much: she must sew, and read, and write, and do her sums; but I want to keep her a child, and if I find more learning desirable for her, I will

see about giving it to her myself. (N.B. This does not mean that he will teach her more; Mr Gibson does not think it necessary. – H.Tohgo) Many a good woman gets married with only a cross instead of her name; it's rather a diluting of mother-wit, to my fancy; but, however, we must yield to the prejudices of society, Miss Eyre, and so you may teach the child to read." (Ch.111) And you see how times have changed since Squire Hamley said to Doctor Gibson: "Osborne might have ([i.e. a thoroughly good constitution]—H.Tohgo) if he goes out o'doors more," said the squire, moodily; "but except when he can loaf into Billingford he does not care to go out at all. I hope," he continued, with a glance of suspicion at Mr Gibson, "he's not after one of your girls? I don't mean any offence, you know; but he'll have the estate, and it won't be free, and he must marry money. I don't think I could allow it in Roger; but Osborne is the eldest son, you know." (Ch.XXX111)

You cannot fault Clare's motive in accepting Mr Gibson. The author says: "Mrs Kirkpatrick accepted Mr Gibson principally because she was tired of the struggle of earning her livelihood; but she liked him personally—nay, she even loved him in her torpid way, and she intended to be good to his daughter,..." (Ch.X1)

But you must ask again, exactly what is changing in these changing times? The main change seems to be in perception of marriage. In this respect, *Wives and Daughters* offers some important insights.

(i) Many different marriages

Mr Gibson's second marriage is different in quality from Osborne's clandestine marriage to the French girl Aimee. In his second marriage Mr Gibson's objective was to provide Molly with a protector, but the second Mrs Gibson turned out to be a crass, self-centred, calculating, sentimental creature who laboured under the impression that she was a sensitive, refined lady. The failure of Mr Gibson's marriage is felt first by Molly and then Mr Gibson, and you may wonder how he could put up with such a wife. On the other hand, some readers see

Osborne as morally weak, or a spoilt weakling, but at any rate Osborne did marry for love, and continued to love her well. The trouble with Osborne was that he was not in the least practical. Knowing too well what his father would say, he never ventured to reveal his secret marriage, nor did he know how to earn his living. How pitifully impractical he was to expect to make his living by publishing his poems!

Cynthia's engagement to Roger Hamley, and then marriage to Mr Henderson was not based on love. Cynthia shines in Hollingford society. She adores attention, but as she admits to Molly, she has no gift of loving. "If Molly had not been so entirely loyal to her friend, she might have thought this constant brilliance a little tiresome when brought into everyday life; it was not the sunshiny rest of a placid lake; it was rather like the glitter of the pieces of a broken mirror, which confuses and bewilders." (Ch.XXX1) Although Cynthia marries Mr Henderson with her mother's encouragement, you can never be sure that she will lead a satisfying family life, in spite of Lady Cumnor's excellent advice. Squire Hamley married money from London to preserve his ancient estate and he loved Mrs Hamley in so far as he was capable. Mrs Hamley had been poorly all her life and it was believed that her disappointment in Osborne hastened her death, but it was essentially the squire's lack of understanding that was responsible for her demise.

The story ends unfinished, intimating that Roger and Molly will get married when he comes home from Africa. Molly became spiritually independent of her father and in spite of his stated wish to keep Molly in a state of simple childishness, she developed a keen interest in nature, or science, and became mature enough to be compatible with Roger. She suffered for the love of her father, the Hamleys, Roger and Cynthia. We know that Molly will continue to cope with the changing circumstances.

So again, *Wives and Daughters* is Molly's preparations for her coming marriage.



(ii) The contrasting personalities of Molly and Cynthia

In his introduction to the Penguin edition of *Wives and Daughters* Laurence Lerner speaks highly of Cynthia. He asserts that the characterization of Molly is made within the convention of the prevalent Victorian values, while Cynthia is something quite new.

Old fashioned critics of *Wives and Daughters* used to praise Molly as the most charming of her heroines, 'the loveliest conception to be found in all Mrs Gaskell's writings' .... Yet Molly is too intimately tied up with what is conventional in the book to achieve the finest kind of life. (Introduction, 1969)

As I have said above, despite her father's educational policy, Molly developed a keen interest in natural science, and as a young girl she possessed a considerable sense of justice and a naivety to match.

To Lady Harriet Molly says:

'No, don't please,' said Molly, taking hold of her, to detain her. 'You must not come—indeed you must not.'

'Why not?'

'Because I would rather not—because I think I ought not to have any one coming to see me who laughs at the friends I am staying with, and calls names.' (Ch.XIV)

This is Molly's naivety, not petulance. Throughout the novel, she is depicted as being made of different stuff than Cynthia. Although she is motherless, Molly is enveloped by the love of her father, the Misses Browning, and the Hamleys. Molly is a spiritually stable, trusting girl. She stands ready to make real sacrifices for Cynthia's sake.

On the other hand, Cynthia is emotionally unstable, with a deep-rooted anxiety. That is why she feels restless unless she is sure that

people are attracted to her. Unlike her mother, however, Cynthia is capable of self-reflection, and knows herself well. "I wish I could love people as you do, Molly." (Ch.XIX) says Cynthia. She also tells Molly how as a child she was not cared for by her mother. (Ch.XIX) In another situation she cries to Mr Gibson: "Oh, sir, I think if I had been differently brought up I should not have had the sore angry heart as I have...." (Ch. L1) Although Cynthia's self-centredness does not lose Mr Gibson's love, she lacks the motivation to develop beyond her unhappy upbringing by means of deep sympathy with other people. Even Mrs Gibson cannot avoid noticing this marked difference between the two girls, though she ascribes the reason to something quite irrelevant. "There is something quite different about you—a je ne sais quoi—that would tell me at once that you have been mingling with the aristocracy. With all her charms, it was what my darling Cynthia wanted;..." (Ch.LV111) Squire Hamley is frank in his appraisal of Molly some time after Cynthia breaks her engagement to Roger Hamley. "I wish I might never hear of her again....Why, there's my boy saying now that he has no heart for ever marrying, poor lad! I wish it had been you, Molly, my lad had taken a poor fancy for....And no offence to you, either, lassie. I know you love the wench; but if you'll take an old man's word, you're worth a score of her...." (Ch.LIX)

All her friends are aware of Molly's worth, in marked contrast to Cynthia's, although not all of them can say exactly what it is that they appreciate in her. Molly does not have to pose as a social rebel to represent the new breed of woman.

### (3) What makes *Wives and Daughters* so worth reading?

In no other work of Mrs Gaskell is the sense of humour so rich as in *Wives and Daughters*. However, this quality is by no means evenly distributed to all the characters. Mr Gibson is endowed with a good sense of humour, but Mrs Gibson is not. She is shown to be a woman of shallow, self-centred, sentimental character.

To cite a few instances:

'Would it tend to cure your—well! passion, we'll say—if she wore blue spectacles at meal-times? I observe you dwell much on the beauty of her eyes.'

'You are ridiculing my feelings, Mr Gibson. Do you forget that you yourself were young once?'

'Poor Jeanie' rose before Mr Gibson's eyes; and he felt a little rebuked. (Ch.V)

Mrs Gibson lacks her sense of humour and betrays the fundamental crudeness underlying her refined surface, when she says of Mrs Hamley:

'What a time she lingers! Your papa never expected she would last half so long after that attack....' (Ch.XV11)

or when she comments on Osborne's child:

'I wonder how the poor little boy is?' said Molly, after a pause, speaking out her thoughts.

'Poor little child! When one thinks how little his prolonged existence is to be desired, one feels that his death would be a boon.'

'Mama! What do you mean?' asked Molly, much shocked. (Ch.LX)

Mrs Gibson seldom shows her sense of humour, but she is often found in a humorous situation.

As soon as Mrs Gibson found that he was not likely to miss her presence—he had eaten a very tolerable lunch of bread and cold meat in solitude, so her fears about his appetite in her absence were not well founded—she desired to have her meal upstairs in her room; ... (Ch.XV)

The younger characters in the novel exhibit less similar tendency; thus Cynthia does not appear in scenes where humour predominates. Molly, however, can be extremely droll, as in the following response to Mrs Gibson.

'I feel so lonely, darling, in this strange house; do come and be with me, and help me to unpack. I think your papa might have put off his visit to Mr Craven Smith for just this evening.'

'Mr Smith couldn't put off his dying,' said Molly bluntly.

'You droll girl!' said Mrs Gibson, with a faint laugh.

'But if Mr Smith is dying, as you say, what's the use of your father's going off in such a hurry?...' (Ch.XV)

Here what is interesting is that although *Wives and Daughters* abounds in humorous scenes and expressions, they are centred in the first quarter and the last quarter of the novel. This is because the most serious incidents and situations develop in the middle of the book. Among those are: Osborne's failure in Cambridge; Mrs Hamley's death; Osborne's clandestine marriage; Cynthia's engagement to Roger and her breach of it; her promise of marriage to Preston, and Molly's extension of help to her stepsister.

So a perceptive reader of *Wives and Daughters* will be quite interested to find that without the first and the last quarters of the novel, *Wives and Daughters* would be a much more serious, if not gloomy, novel. And I am not sure if it would invite such an enjoyable second and even third reading.

(本稿は1994年2月5日に英国ギヤスケル協会イングランド南部支部の例会において口頭発表したものである)

- 当時の流行作家であるディケンズに宛てたこの手紙は、「あなたの忙しい生活を邪魔して誠に申し分けないのですが、お願いがあります。」という書き出しで進められている。
- (3) Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber and Faber, 1993), p.320.
- (4) 三好行雄『一葉と日本近代の底辺―「じいりえ」を中心に―』岩橋邦枝他著 群像 日本の作家③『樋口一葉』小学館 一九九二年 一九九頁。
- (5) Alan Shelston, ed., *Ruth by Elizabeth Gaskell* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1985), p.5. 以下、『ルース』からの引用は、すべて文中に頁数を記す。なお、訳文は拙訳である。
- (6) コリント人への第一の手紙・10章24節。英文では、*Let no one seek his own, but each one the other's well-being*となっている。
- (7) Angus Easson, ed., *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1991) p.212 一八五三年一月十五日のスペクテイター紙における『ルース』の批評は、中産階級の物の考え方の尺度でなされている。従って、ルースの物語は実際の生活よりも思いつきから発
- しているとして、めったにない話だと強調している。
- (8) *The Letters*, p.694.
- (9) 福田清人編 小野美紗子著 人と作品『樋口一葉』清水書院 一九六六年・十五頁。
- (10) Arthur Pollard, *Mrs Gaskell: Novelist & Biographer* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1965), p.103.
- (11) Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (London: Routledge & Kegan Paul, p.120.
- (12) スティーヴン・マーカス著 金塚貞文訳『もう一つのヴィクトリア時代―性と享樂の英国裏面史―』中央公論社 一九九〇年 五六頁
- (13) A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life & Work* (London: John Lehmann, 1952), p.123.
- (14) Patsy Stoneman, *Elizabeth Gaskell* (Brighton: The Harvester Press, 1987), p.116.
- (15) 塩田良平著『樋口一葉研究』中央公論社 一九五六年 七二三頁

支配的である。この固定観念を修正するかのようには、ギヤスケルと一葉は多様な現実において、人間を理解する方法を取っている。必然的に、若い娘が良き男性と結ばれるまでの過程を軸に展開するストーリーにはなりえない。モラルを放棄せざるを得なかったルースとお峯を正当化しようとする、大胆で矛盾に満ちた試みとなって表れている。作家にとつてこの重荷が、どれほどのものか容易に推察できる。現実生活では到底に起こりえないような出来事や、不自然な設定と偶然性がそれぞれの作品の中で、認められるからである。しかし、読者はそれらの虚構を許容できる。なぜならば、競争と商業の論理に支配される新興産業社会で、忘れ去られていく人々に強い共感を覚え、擁護しようとする作者の思いに感動するからである。『ルース』と『大つごもり』は、財産も投票権も持たず沈黙させられている人間の誠実な生の営みの世界へと読者を誘い込む。そして、読者の想像力に訴えて、前近代的なものが残存する人々の意識を変えようとする。

つまり、ギヤスケルと一葉は自らの創作において、多数の親切で善良な心の人々の中に同情心をわきたたせ、何か小さな程度でも人類に対する敬意の念と、人間の本性についての知識を大きくするの役にとうと希望したのである。そこには、ある強大な権力を奪うことによつて、世界を変革する

というビジョンは示されていない。その代わりに、どんな手段を取つても、他人を駆逐すれば勝ちだという近代社会の持つ歪みはつきりと告発されている。共感から一歩進んで、他者を思いやるという精神を読者に自覚させることによつて、世界をより良い方向へ動かそうとした作家の実践力が発見できる。『ルース』と『大つごもり』は、現代とは価値観に雲泥の差がある過去の作品だという位置付けから自由になつて、本格的にテキストを読み解く作業をさらに進めなければならぬ。

#### 注

- (1) 樋口一葉、『たけくらべ・にこりえ』(校註、岡田八千代) 角川文庫一九九二年・六頁。以下、『大つごもり』からの引用は、これをテキストとして、文中に頁数を記す。

- (2) J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, ed., *The Letters of Mrs Gaskell* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1966), pp.98-99.

以下、この書からの引用は *The Letters* と記す。

する。そのため、ルースは個人的な感情を抑えても、ベリンガムを救う必要があったと言える。人々の手におえないチーフが蔓延している時に、瀕死の病床にあるベリンガムの看護に出かけようとするルースに、事情を知っている医者へのディピスが、あんな男は救う価値がないと言う。すると、ルースは「私たちは、お互いに人間の価値を決めるような権利など持っていません。」(p.440)と言う。人間関係を支配者と被支配者という関係でしかとらえないベリンガムと、相互扶助の関係とみるルースの考えの違いが浮き彫りになっている。どちらが正しいか、明らかである。最期のレナードのせりふ、*"My mother is dead, sir."* (p.458)には、母親を奪われた無念な気持ちが表示されているだけではない。不完全な人間同士がお互いに助け合うことを忘れて、人間が神よりも厳しく人間を裁いたことへの怒りと悲しみがこめられている。この点において、ルースは現世では救われていないのである。

『大つもり』においても、お峯は決して救われない。確かに、お峯は石之助によつて罪を逃れられたが、お峯の心の傷はどうなるのだろうか。「後の事知りたや。」(二十二頁)として作品は終えられているが、読者はお峯のその後を推測できる。彼女はこれからも、自我を持つ積極的な生き方は許されないであろう。さらに、お峯を絶体絶命の境地から救った

のが、お峯とは信頼や友情関係のない石之助であるところに、悲しさは助長される。石之助は家の世嗣の子であるが、継母から冷遇されている。愛情に飢えている石之助は、「…貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を当てに大飲み場所もさだめぬ。」(十五頁)作者は彼を肯定していない。継母の御新造に愛が欠けているように、彼には正義感が欠けているからである。大みそかに借金取りに責められる人々の苦しみや、放蕩息子がする親の金の持ち出しの向こうには、社会の仕組みが透けてみえる。個人的体験は社会的文脈の中で理解しうるものとなっている。つまり、社会の底辺であえぐ人間に、何一つ同情心を持たない御新造を典型とする金銭上の問題がない階級が説く道徳が、無意味なものへと変化する。「ひが者一葉の抵抗は、対家庭、対男性へと拡大されていった。」<sup>5)</sup>という塩田氏の指摘が示唆するように、一葉は下女のお峯を取り巻く周辺を描くことによつて、独立した一個の自己をもつ権利を主張したと言えよう。

以上、概観したように、この二つの小説は十九世紀の社会が無視し葬り去ろうとした存在、女子労働者を「道徳的落伍者」ではなく、真のヒロインに仕立て上げている。貧困は怠慢な本人の責任であるという見方が、階級社会においては

制度的土台となるべき教育や職業から、締め出された女性に焦点を当てる。ここで、支配的な文化や伝統から排除されたルースとお峯の行く末を確認してみなければならぬ。

(四)

ルースは何も知らない無垢な状態から出発し、自分の置かれた社会状況との格闘を経て、他者の犠牲となり死ぬ。ホプキンズは、ルースがチフス患者の看病に専念し、その勇気を人々が賛美し感謝したところで、ギヤスケルは物語を終えるべきだったと言う。ストーンマンは、多くの批評家は見逃しているが、ルースは人生の最期に気が狂ったと指摘している。ルースの死については、様々な解釈が可能であろう。だが、『ルース』の最大の悲劇は、物事を正しく判断し実行出来たのは、世の尊敬を集め、果たすべき重大な役割を持つているブルジョアジーや紳士たちではなかった点にある。本来、彼らは世の光となり、恵まれない人々を導かなければならぬ。しかし、彼らは観念的にしか他者を思いやれない。物語の後半を見てみよう。ダンと改名して登場したベリンガムは莫大な財産の使い道に困って、国会議員の選挙に出馬する。彼は名誉を守るため、選挙でばらまく賄賂を他人の責任にし

てしまおうとする。ルースと再会すると、ルースとの間にできたレナードを出しにして、美人ルースへの所有欲から愛人になしようとする。ルースがそれを拒絶すると、今度は正式な結婚を申し込む。こうした自己中心性は、非国教徒であり実務者として腕をふるうブラッドショウにも認められる。彼は厳格に、ルースに罪人としての烙印を押そうとする。その一方で、彼の息子のリチャードは、自分の浪費の埋め合わせに文書偽造をして、内密にベンソンの持ち株を売り払ってしまった。ギヤスケルは彼らの偏狭さを皮肉るかのように、公の場でなく台所の隅にいる召使いサリーに、より自由な広い魂を与えている。サリーはベンソンの母親から教えられた、*a self-seeking spirit* (p.176) (自分の事だけを考えること) を戒める生活信条を持つている。神の眼から見ても正しい事をするという彼女の信念は、ベリンガムを拒絶する態度へと直結する。ルースが死ぬと、ベリンガムはサリーの気持ちを抑えようとお金を渡す。ここでの金銭はベリンガムの誠意を表していない。利害による揺す振りをかけ、人を意のままに御してきた彼の非情な手段にすぎない。サリーは受け入れない。ここで、サリーの *"I was not kind to you."* (pp.451-452) が、四回繰り返される。

ギヤスケルは、倫理的存在としての人間のあり方を追及



メイソン夫人に目を向ける。「早くしないと、同じ通りにあるライバルの洋服屋の手に渡つてしまふ。」(59) ため、彼女は使用人の健康を無視して働らかせる。そして、家庭内の面倒で骨の折れる仕事は女中に任せ、きらびやかな衣装を身にまとうのに熱心なヴィクトリア朝期のレディが持つ軽薄さは、メイソン夫人と結びついてゐる。「メイソン夫人は立派な女性であつたが、多くの価値ある女性と同様に、ちよつとした悩みがあつた。それは、(職業からする当然で)極単に見かけを気にした。」(60) 世間を気にかけて、着飾る中味のない人間が皮肉られてゐるのは言うまでもない。ルースに救いの手を差しのべるのが、小人の様に背の低いせむしのペンソンであるならば、レディであるペリンガム夫人は、ルースに相応しい場所は売春婦更正所であるとし、息子との関係を処理する。ペリンガム自身も責任を逃れてゐる。

ポラードは、ペリンガムは「narrowness」、物の見方が狭いと述べてゐる。イーンソンは、「母親から甘やかされた子供」だと言う。だが、ここでは少し角度を変えてみたい。ペリンガムの意識の底にあるものを顕在化すれば、英国家長制社会につき当たる。ペリンガムがルースを性的に誘惑するのは、この時代においては異常ではない。多くのヴィクトリア朝中産階級の男性が、娼婦を愛人としていたのは公然の事実であ

つた。また、家庭の夫人は性的欲望を持つていないとみなされてゐた。要約すれば、愛人は用がなくなれば情容赦なく見捨てられ、貴族階級の男性の体面は保たれ名譽は守られたのである。ペリンガム夫人がルースに示した仕打ちも、あくまでもレディの処女性に固執した当時の教育のなせるところである。それは、昼間の上品で立派な世界を支えるのに必要な暗闇、繁栄のために大英帝国の体質と言へる。

『大つごもり』を見てみよう。そこには、女性を男性に從属する者としてとらえる社会が映し出されている。女性は人格および行為よりも美貌で評価される。山村家の下女として務めを果たすお峯を辛抱ものと言う人もいるが、「第一容貌が申し分無しだと、男は直きにこれを言ひけり。」(八頁) 徳川幕藩体制下で培われた社会意識は閉じたものであり、以前としてそれは変わらうとしないことを、一葉は訴える。富裕な山村家は、自分たちの都合でお峯の労働を浪費し、私物化しているのに気がついていない。病人の安兵衛と彼の家族が長火鉢のない部屋で凍え、明日食べる米もない師走に、若旦那はこたつで居眠り、嬢さま方は追羽子で遊んでいる。この場面には、奉行人の忍従の生活に恐ろしいほど無関心である「床の間」の主人への痛烈な批判がある。

このように、二つの作品は平等に社会に参加するための

あらはに衣破れて、此肩に担ぐか見る目も辛し、……(十二頁)という清貧にあえぐ姿を目の前にして、お峯は深い人間愛へと駆り立てられる。結局、お峯は二円の融通を主人に願ひ出る。だが御新造は先日は承知したようなことをいつておきながら、大みそかになつて「私は毛頭も覚えの無き事」(十六頁)と冷たく言い、とりつく島もない。そこで、お峯はせつばつまつてお金を抜きとつてしまふ。その後、彼女は罪を安兵衛に転化せずに「屠所の羊」(二十二頁)となる覚悟を決める。お峯の感情は一葉にとつて、最も共感できるものであつたに相違いない。

このように、血のかよつた愛すべきヒロインたちは、読者の同情を確保し持続させていくだけの魅力を充分に持っている。にもかかわらず、寡黙で美しい「純白」の娘たちは、当時の指導者が激しく忌み嫌つた純潔を失う行為と結びついている。彼女たちは「虚」の世界では救われているが、現実であるならば、彼女たちに残されている道はなかつただろう。例えば、一八五三年のスペクテイター紙は、「ルース・ヒルトンの話は極端であり、例外である。」と述べている。また、作家としても読者の手本となるヒロインと罪の汚点とは無関係におきたかつたはずである。とりわけ、ギヤスケルと一葉は人一倍強い倫理感を持つている。ギヤスケルは、親友

トッティ・フォックスへの手紙の中で、「人は私のことを社会主義者とか共産主義者だと言うが、私は本当のクリスチャンだと自分では思つている。」と告白している。また、一葉には武士の娘としての誇りがある。「一葉の両親があくまでも武士の娘として課したきびしい躰」が、彼女の内部にしっかりと刻みこまれていく。つまり、娘の貞操を失つたルースと盗みのお峯の物語は、社会通念に追隨するリアリズムを避けた結果だつたのではないだろうか。大衆の病氣、犯罪、貧困という人生の切実な問題とヒロインを直接に対決させることによつて、我々を取り巻く社会の諸相が明確化している。次の章で、それがどのように描かれているか、そして、急速に発展する産業社会の背後で発生している問題に対して、小説ではどういふ解決が模索されているかを概観したい。

### (三)

二つの小説において、登場人物は単純に正邪に二分されていない。言い換えれば、登場人物は単独の人間ではなく、巨大な資本主義社会の中で生きる個人となつていく。読者はメイソン夫人の身勝手な性格よりもむしろ、良心に反した手段を使つても、苛酷な生存競争に勝ち抜こうとする雇い主の

っている。ギャスケルと一葉は、労働者階級の女性に与えられている世間のイメージを覆す。彼女たちは品良く従順に振舞えないという偏見を打ち破っている。そのため、ルースとお峯が人間としていかに優れた資質を備えているかが、繰り返し説かれている。

ルースは自らの過去が知れて家庭教師の仕事を失った後、病人の看護をするという当時の人々が非常に見下げた職業を選ぶ。ジェミマはルースのような読み書きのできる人間が従事する職ではないと主張するが、ルースはチフスの感染を恐れて誰もやりたがらない病人の世話をする。しかも、それは熱心に、目立たないようにされる。ついに、エクレストンの町でルースが未亡人であるのは嘘だと明らかにされた時、人々はその罪の償いをルースはやっていると思う。しかし、妻をチフスで失った老人は語る。「…彼女は償いとして仕事をやっているのではなく、神の愛のため、恵み深いイエスの愛のためにやっている。あなた方や私が遠く離れている時に、彼女は神の御顔の光の中にいるだろう。本当に私のかわいそうな妻が死んでしまった時、誰もそばには近寄らないだろう時、あの時に妻の頭はこの女性の優しい胸にのせられている。」(p.429)ここで、述べられている「this woman's sweet breast」に、ルースの勇氣と慈愛が象徴されている。それは

キリストが教えた自己犠牲と献身の姿に他ならない。「だれでも自分の利益を求めないで、他人の利益を心掛けない。」<sup>⑥</sup>という聖句が、ルースにおいて具体化されている。従って、最終的にルースは牧師ベンソンを凌ぐ倫理的指導力を身にかけている。ルースの葬儀の説教の準備をするベンソンが、ルースの生涯の謙虚な心と優しさを思い出し、涙しながら、自分の言葉はもはや彼女を語るのには何の訳にも立たないと思いき知るといふプロットに、それは示されている。

『大つごもり』においては、礼儀を守り恩に報いるお峯の美德は深く読者の胸にしみ通る。「術もなし、法もなし、正直は我が身の守り」(二十二頁)と言うように、習い覚えた技術を持たないお峯にとつて、正直一途の奉行ぶりは世間を渡る彼女の武器と言える。両親亡き後、育ててもらった伯父の安兵衛一家のためと言つても、潔癖な彼女が給金を前借りするのは魂を売るに等しい。「むづかしき主を持つ身の給金を先に貰へば此身は売りたるも同じ事」(八頁)という意識は、彼女の自尊心から来ている。しかし、勉強好きの八才になる三之助が、学校にも行けないで寒空の下で肩に、しじみをかついて行商をし、葉代をかせいでいると知った時、彼女は傍観者の姿勢を捨てて、「三之助はおとなしく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目

一葉を追いつめた。」

こういつた作者たちの体験は、陽のあたらぬ市井を生きる人々の側に立って、「書く」ことを可能にしている。十二才で母親が病死し、農夫だった父親が没落して、十五才で孤児となったルースは、お針子以外に就く仕事はない。『大つごもり』では、大工であった父親が事故死をして、次いで母親が病死すると、お峯は家事奉行に出る。本人の意志や努力とは無関係に、ルースとお峯は自らの生き方を決められない。頼る肉親や財力のない彼女たちは、人生の最初の段階で、いきなり広い不可解な世の中に投げ出されている。何一つ確実に依存できるものを持たない者が知覚する世界が、小説で再現されている。

寒いうす暗い部屋で、情容赦なく深夜労働を強いられるお針子たちの登場で、『ルース』は始まる。わずかに許された休憩時間に、ルースは大きな窓に顔を押しつけて月光を見ている。その姿に、*'a bird against the bars of its cage'* というイメージが与えられている。鉄格子のあるかごに閉じ込められた小鳥は自由を奪われ、新鮮な空気を欲してやがて衰弱死するという意味合いがある。ルースの苦しみに抽象的な言葉は用いられていない。従って、初めの数頁には肉体的苦痛を示す表現が多い。*"the weary muscles" (p.4)* *"her*

*aching eyes" (p.5)* *"a long hard fit of coughing" (p.5)* といった中に、若い女性の心身の成長を殺す非人間性が告発されている。

お峯の生活も、張り詰めた、苦勞の多いものである。彼女は家事労働に縛られているばかりでなく、御新造から常に命令され支配されている。お峯は井戸から水をくむ時に、激しい労働で下駄の鼻緒がゆるみ、流し元の水にすべって転ぶ。向こうずねを打った様子が、「可愛や雪はづかしき膚は紫の生々しくなりぬ」(七頁)と書かれている。一人の人間として認められないお峯の屈辱感が、色鮮やかな白と紫のコントラストにおいて強調されている。そして、お峯の持っていた手桶の底がぬけてしまう。すると、御新造は厳格にお峯を叱りつける。「此桶の価何ほどか知らねど、身代これが為に漬れるかのやうに御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは著の上げ下ろしに、此家の品は無料では出来ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が当たるぞえと明け暮れの談義、..」(七頁)ここに、非熟練労働者の地位から生涯、抜け出られないお峯の孤独がある。

こういつたお針子や下女といった一見落ちぶれた人々の魂に宿る人間性の価値と尊厳を、小説家はしっかりと見て取

較することによつて、作品の共通部分を探つてみたい。そこには、効率の良さを最優先する「近代」が忘れ去つた者、貧しいながらもひたむきに誠実に生きる者への作者の強い共感がある。この「共感」は単なる感傷や、自然への憧憬や讚美といった範囲に止まらない。社会的弱者を邪魔者として閉め出す同時代のものの見方に、異議を唱え矯正しようとする「実践」の力に移行している。以下、それを明らかにしてみよう。

(二)

ギヤスケルと一葉の人生の軌跡に、類似的体験を見るのは容易である。彼女たちは、世間から完全に無視され、取り残された者の実生活がどのようなものであるかを熟知している。

ギヤスケルに関しては、多くの批評家が指摘しているように、売春の少女達と交際があつている。一八五十年にギヤスケルは、マンチエスターの監獄で知つたパズリーという少女をオーストラリアに移住させようと、チャールズ・ディケンズに手紙を書き依頼している。パズリーとは、売春婦更正所に入れられたことのある十六才の娘で、ルースのモデルと

なつてゐる。歴としたユニテリアン派の牧師婦人であり、中産階級に属するギヤスケルが、売春婦に関心を払つていた理由として、教会活動が挙げられる。ギヤスケルは日曜学校で、不幸な生い立ちの少女たちと接している。その中には、多くの仕立屋の助手たちがいたが、ユーグロウの説明によると、このお針子たちと売春は結びついていたのである。つまり、お針子の収入では生活を維持できないし、すぐに解雇される不安定さがあつたので、彼女たちは街の女にならざるを得なかつた。英国産業資本がその支配権を確立していく中で、労働者階級の女性が生きていく際につき当たる現実の問題を、ギヤスケルは身近で知つていたと言える。

一葉にとつても、世の中は如何にも女性の力に及ばないものであるというのが、実感であつたであらう。彼女自身が味わつた貧困は、一般に知られているが、ここでは、三好行雄氏の説明を引用したい。「明治二十六年の末あたりから樋口家の家計は極度に逼迫し、ために、いちは文学の放棄を思いつめたこともある。一家は生計のつてを求めて、下谷の大音寺前、本郷の丸山福山町などの〈塵の中〉に移り住み、〈乞食を相手に朝夕を暮〉すような日々を身をかけたが、その間、さしせまつた貧困は親戚知人はもとより、見も知らぬ他人にまで借金を申し込むという、なりふりかまわぬ場所に

## ギヤスケルの『ルース』と一葉の

### 『大つごもり』の対比研究

— 共感から実践へ —

(A Comparative Study of Gaskell's *Ruth*  
and Ichiyō's *Ostugomorī*)

金丸千雪

(一)

井戸は車にて網の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆうひゆうと吹きぬきの寒さ、おゝ堪へがたと籠かごの前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大台にして叱りとばされるゝ婢女の身つらや、…

『大つごもり』の冒頭で描かれているのは、下女のお峯が奉公先で体験する忍従の生活である。十八才のお峯はまだ月影の残る早朝に、お嬢様の朝風呂を用意する。樋口一葉（一八七二年—一八九六年）は、この作品で美しい娘の清純さを物語っているが、青春謳歌の文学とはなっていない。エリザベス・ギヤスケル（一八百年—一八百六五年）の『ルース』も、同様である。無垢と美の象徴であるかのような十五才の

ルースのストーリーは、前半は彼女の青春を嘆くような内容である。後半になり、彼女は社会との絆を回復していく。与えられている結末は、ルースの悲痛な死である。

『ルース』と『大つごもり』のヒロインは、小説がますます若い婦人達の期待に応えていかなければならなくなつた英国ヴィクトリア朝と明治期に創り出されている。当然、時の社会が望ましいと考える女性像が求められる。しかし、この二つの作品のヒロインは、当時の読者層である中産階級が支持する「家庭の天使」の対極に位置している。ルースとお峯は共通して、無力な孤児であり、低賃金で劣悪な環境下で働く女子労働者である。当時の読者大衆の暮らしとは、掛け隔っている。その上、十九世紀という厳格な家父長制社会の中で、彼女達は社会規範を逸脱している。結婚をしないで母親となつたルースと、奉行先で二枚の紙幣を抜きとつたお峯を庇うような小説は、時代の制約を考えると問題含みである。

職業作家としての自覚を充分に持っていた時期に、なぜギヤスケルと一葉は敢えて読者の思いに逆らうような小説を書いたのだろうか。作家として読者に信頼されなければならぬという考えがある一方で、小説は何をすることができるか、自分達の真の仕事は何であるかに、彼女たちは気がついていたのでないだろうか。本論では、この二つの作品を比